

れ飛ぶ。

秀子（見る見る蒼白く血の氣を失い、額へ青筋を立て）おすみ！ 何て眞似を主人へ向つてするんです！

すみ子（秀子の顔を睨み上げて）子供だと思つて、あんまり馬鹿にしないで下さいまし。

こうして、再び養育院へ戻されるのであるが、その後、三年のあいだ院の附屬小學校で學んで、琵琶の師匠のところへ女中に出る。だが、そこでもまた男の暴力が彼女を待つていた。

妻に先立たれた師匠は、ようやく成熟したすみ子の美しさに惹かれ、それとなく思ひ續けていたが、たまたま彼女の子供芝居の時分の昔馴染が訪ねて來たことから嫉妬し、酒の力を借りて籠絡しようとしたが果せず、却つて飛出されてしまふ。師匠の家を出た彼女は、昔馴染の新太郎と連立つてさ迷い歩き、揚句の果に心中するが助けられる。

二人は別々になり、すみ子は天主園というキリスト教の婦人收容所に容れられる。ここでもまた、神の名によつて、神聖な義務を果そうとする偽善者たちの惡徳を見せつけられる。

すみ子が收容されて間もなく、おかくという三十年配の婦人が、いよいよ明日出所するが何か言傳はないかと尋ねる。それは、すみ子の情死前後の事情を知つているところから、相手の男に思ふ

ことがあつたら言ひ傳えてやろうという親切である。彼女は、もう新太郎のことは思い切つていふという。懐しいことは、懐しいけれど、氣の弱い男ゆえ、なまじ情に絆ほだされたことを今になつて告げようものなら、却つて死を早める結果にならぬとも限らない。やつぱり諦めます、と辭退する。だが、おかくは自分の經驗から割出して、色々に愛人への思遣りを説くのである。

一度は斷つたすみ子も、重ねて勧められるとその氣になり、慌しい思ひで手紙を書く。だが生憎、その手紙をおかくが懐ろへ入れようとするところを、主任の矢澤うめ子に見附かる。矢澤は何喰わぬ顔で支度は出來たかという。おかくはほつとしながら手廻りの荷を持つて後へ隨うと、矢澤は立停まつて、何を入れたの、と訊ねる。「何か手紙みたいなものを入れたね。」おかくは、詮方なく取出す。

うめ子（封を破つて黙讀してから）これ、すみ子から頼まれたの？

おかく はい奥さま。

うめ子 そう云う事は、ここでは固く禁じてある事を知りませんか？

おかく（絶體絶命的に）よく知つております……でも、無理矢理すみちゃんから頼まれたもんですから、つい可哀相になつて――

うめ子 人が可哀相なら神さまの掟はどうなつても構わないですか？ せつかく立派に今日出ようつて云うのに、そんな罪を犯しては困るじやありませんか？

おかく 奥さま、どうぞ、今日だけは御見逃し下さい。わたし、奥さまのお力で今日こゝを出られるのを、どんなに神様に感謝しているか知れません。それを、こんな真似をして、……まつたく悪魔に魅入られたんでございます。でも、奥様の御言葉で心から悔い改めて、悪魔を追い出してやりました。どうぞお信じ下さい。

うめ子 (それに答えず) きつと、すみ子に押付けられたんですね。

おかく はい。

こうしておかくは、別に咎められずに出所する。おかくの出所した翌日は、日曜説教の日である。うめ子は、手紙の一件を厳しくすみ子に訊問した。すみ子は悔い改めることを誓つて詫び入るが、天主園の主任はなかなか聞き容れず、神さまへの贖の爲めにも、もう一度大勢の前で證を立てろという。それだけは是非赦して下さいと云つて憫みを乞うのだが、矢澤は、なおも聞き容れぬのである。參會者がどやどや入つてくる。お祈りが始まる。讚美歌が終ると、うめ子が説教臺に立つた。

うめ子 これから日曜の説教をいたします (間をおいて) その前に、一寸時間を頂きまして姉妹の一人に證をさせます。これは普通の順序では御座いません。が、今日お話して見たい聖書の中の言葉が、その姉妹の事に大へん深い関係がございますので、さきに證をして貰つた方が餘計わかつて頂けるだろうと思つて、臨時に變えたのでございます。どうぞ御承知下さい。

(老人達の方へ向つて一寸頭をさげる)

うめ子 (大びらに呼ぶ) では、すみ子さん。

(全衆一齊にすみ子の上に視線を集める)

うめ子 ここへ来て證をして下さい。

(すみ子痙攣的に身體を慄わせて俯む。傍の者、低く「すみちゃん」と言いながら膝で體を突つ

く。)

うめ子 (重ねて) さつき約束したように、みんなの前で證をして下さい。

(すみ子相變らず黙つて働かない)

うめ子 (咎めるように) すみ子さん。

すみ子 (眞蒼になつた顔をあげて) あたし、約束なんかしません。

うめ子 (意外そうに) だつて――

すみ子（首を振つて）いゝえ。

（うめ子怒り氣味になり睨む。すみ子見つめ返す。會衆緊張して来る。）

うめ子 ようござんす。あなたがどうしても恥かしくつて言えなければ、わたしが代つて上げましよう。（會衆の方へ向き直つて）皆さん！

すみ子（突然立ち上つて、半ばうめ子に向つて、半ばは會衆へ向つて、咽ぶように叫ぶ）愛だなんて——神さまが、愛だなんてみんな嘘です！

（みんな驚愕して彼女を見る）

すみ子 あたしがあんなにお詫びしたのに、許さないで、どこまでも苦しめて恥をかかせようなんて、そんな神さまなら決して愛じゃありません。神さまが愛なら、あたしもう夙に許して貰つてる筈です！

（皆唖る。）

うめ子（痲癢を起して）お黙りなさい。すみ子さん。

すみ子 いゝえ申します。神さまは愛でも何でもありません。そんな神さまなんか、無い方がオツと増しです。あたし、今までは本當に神さまを信じようと思つていました。でも、もう信じません。天主園なんて嘘です。何もかも大嘘です！

かくて彼女は、信仰に生きる人達の生活にも、自分を安住させてくれる世界のないことを悟るのである。

子に對して負うべき責任を自覺してくれなかつた母、子供である自分を忘れたように男と家を出て行つた母、こうした母を持つた子供として育つたすみ子は、多くの子供が受けたと同じ愛情すら懸けられずに、呑んだくれの叔父から人の手に、そして、やがて獨りの力で荒い生活の波を漕ぎ抜けようとして「社會」に出るのだが、そこに待ち構えていた人間の世界は、餘りにも虚偽と欺瞞に満たされた世界であつた。人間としての悦びや誇りは、少なくとも女として辿つた彼女の十六年の生涯には見出せなかつた。彼女は、染々とそれを知つた。

説教のあつた夜である。夜陰に乗じて放火する。彼女は、嬉しそうに燃盛る火焰を眺めた。天主園は焼けた。彼女も捕えられた。

西鶴の描いた「戀草からげし八百屋物語」のお七は、戀しい男に逢おうとして放火する。田山花袋の「重右衛門の最後」に出てくる得體の知れぬ少女も、儂い最後を遂げる重右衛門の怨みを晴らそうとして、村全體に火を放つ。すみ子は、この何れでもなかつた。

まことに、彼女をしてそこに導いた経路には、この世の凡ゆる女たちが噴まされたと同様の、誤られた道徳や因襲や環境の拍車があつたのである。萬葉以後、明治の初期へかけて多くの小説に描かれた女主人公たちの生活は、一樣に「七夫の罪」に逆らわぬことと、三従の教えに殉ずることであつた。貞節と夫唱婦従の道徳である。これらは徳川期に完成された女的美徳であると同時に、その後の世代に生きる女の道徳をも規定していた。このことは、大正を隔てて今日にまで續く傳統である。

前代の小説に描かれた多くの女性たちと比較するとき、すみ子は、確かに前進している。女である自分の生活を自覺している點で、人間として、一人の人格として女の誇りを持つと努力している點で、人間を片輪にしている虚偽の生活と偽善行爲とを見抜いている點で、またそれと闘おうとして、ひよわな魂を勇氣づけながら環境に立向つてゐる點で、前のどの小説にも見られない高さに、おのれの生活を引上げてゐる。

窪川稻子の「キャラメル工場から」のひろ子も、すみ子と同じ年頃の少女である。

仕事のない父親と、兄弟の多い家庭からキャラメル工場へ通うひろ子は、一日十八錢の工場労働者である。始業時間の早いその工場では、ひろ子と同年配の少女たちが、毎朝の如く、始業に遅れまいとして、三膳はいる胃の腑へ一膳だけ容れては駆けつける。遅刻でもすると、一日休まねばならなかつたからである。彼女たちは、一日でも休むことが恐ろしかつた。一日分だけ、肉を殺されるように家計が削られた。これは勤勞者の生活に共通すると同時に、彼女らの小さな脳髓にも泌みこんでいる常識であつた。

水である限り凍つてしまふような冬の日であつても、罐洗いに湯を使うことも出来ず、油を賣ることなど、もちろん出来ないこれらの少女たちの生活は、「新婦人協會」(平塚明子らの婦人運動)の人達が想像さえしなかつた、女の暗い生活面である。日給制が廢止されて、一罐の賃銀を數えるようになった頃から、ひろ子たちは、倍の勞働と努力とを傾けねばならなかつた。震災を過ぎる前後の一般經濟の餘波が、このか細い彼女らの兩腕に、ひし／＼と伸掛つてきたのである。

少女たちは、金にならなくなると、或る者はお酌になり、或る者は女中に鞍替して働きに出た。ひろ子も、郷里の先生から、「誰かから何とか學費を出して貰うように工面して、大したこともないのだから、小學校だけは卒業する方がよからう」と書いて來た時分には、キャラメル工場を罷めて、チャンそば屋に住込んでいた。

彼女は、こうした境遇に置かれている自分を、決して幸福とは思っていないが、と云つて、すみ子の如く積極的に自分から突き抜けようとはしなかつた。

同じ年頃の少女であり、同じ働く境遇の生活に置かれていながらも、この二人の少女の生長の過程には、著しく懸隔が示されている。すみ子が、衝突する生活の矛盾や不調和に憤りをもつて立向つているのに反し、ひろ子は、郷里の先生から、小學校だけは卒業するようにと云つて手紙が来た時も、読みかけて破り、破いたのを摺んで便所に入り、暗いチャンそば屋の便所の中で、用も足さずに泣きながら読んでいた少女である。この少女の姿こそ、或いは當時の少女一般の姿であつたかも知れない。

學校へも碌々やつて貰えず、家計の一部を分擔させられて油断なく働かねばならないこれらの少女たちは、現實として負わされている諸々の負擔や重荷や、女であることの名によつて傳統的に押しつけられてきた道徳上の勘定書に對して、やがては目覺め、はつきりした判断と認識によつて自己を正統に生かす日もあつたに違いない。

すみ子のような少女が、それを物語つていると同時に、女の自覺の方向に、新しい一つの基礎を示していることは興味がある。彼女は、その克服の生活を経て、やがて片岡鐵兵の「生ける人形」の弘子のような女性ともなり、すつと近くへきて、「母系家族」の葵ともなり、或いは、「東京

の女性」の節子のような女性ともなつて成長するに違いない。

III 解放された犠牲（大正期の省察）

1。
明治から昭和に橋を架けた大正の時代は、僅かに十数年の期間に過ぎぬが、わが國民が日露戦捷によつて世界的自覺を促され、さらに歐洲大戰によつて、愈々その自覺に緊張を加えねばならなかつた時である。しかし、事實は、この時期を普通デモクラシーの時代として、改造、解放の合言葉が諷しく言交された時代として知られている。従つて、一般の思想も、女性のモラルも、既成の圍みから解き放たれて、劃期的に放漫な弛みを帯びた時代である。それは、谷崎潤一郎、その他の唯美主義、耽美派といわれる作家たちによつて特徴的に描かれている。

谷崎潤一郎の描いた女性の多くは、因襲から食出すばかりでなく、戀愛を情痴の一面に引下して人工的な技巧を凝らすか、功利的に享樂する姿として描かれている。そこには、因襲が表われているだけでなく、正しい愛情の自然ささえ嘲られている。愛情が、本能的な面で技巧をこらされ、その技巧的な變態のなかに異常な美が求められている。戀愛が最早や美の正しい形成に盡さず、異常な怪奇の世界に頹廢しゆく姿をこゝに見る。このように怪奇な、背德的な、そして殘虐の情調のなかに美を求めたのは、オスカー・ワイルドの「サロメ」や、「ドリアングレーの畫像」などである。或いは、ボードレールの詩である。これらは總べて世紀末の個人主義における不安に根差していた。その不安の心理と、肉體的慾望との痺れ歪んだ合奏の響であつた。世紀の不安に怖れ戦きながら、自己の生存の他に目標を失つた焦躁のあらわれでもあつた。ワイルドのサロメは愛を受け容れられなかつた怨みから、豫言者ヨカナンの血汐したたる生首に接吻しながら、復讐の快感に浸る。云わば、このようにして疲勞し、焦躁する個人主義の憫れな人間的破滅が描かれたのである。

また一方、大正期の文學においては、女性も最早、舊い掟に忍従の美を讃えるものとしてではなく、因襲の無價値を冷笑し、高らかに、嗤い去る姿として描き出されている。それは、菊池寛、芥川龍之介の作品のなかに、新しい理智の自覺めとして、描かれている。

たとえば、「眞珠夫人」の瑠璃子は、因襲への反抗に燃え、それを復讐し、冷笑しようとして自らを滅ぼしてゆく。理智の窄さ、エゴイスティックな自己優越心の、空虚な敗北であつた。芥川の「袈裟と盛遠」における袈裟と盛遠は、互のエゴイズムを満足させることにのみに捉われて、愛情の共感に浸り得ない様を、抉り出されている。個人主義に捉われた愛情の冷酷さと無情な姿の指摘

である。

その他の作品においても、芥川は習俗から解放された女性のエゴイズムが、形式主義を否定して自主的に伸びようとしながら愛情の本質に辿りつき得ない姿を捉えている。云わば、大正期において折角たゞかい取つた女性の自主性が、いかなる悲劇に遭遇しなければならなかつたかを暗示している。

概括的に言えば、明治期の女性は、個人意識の目覚めが解放される機縁なき故に苦惱したとすれば、大正期の女性は、解放されたための悲哀を、解放されながら倒れゆく悲劇を演じたと云えるだろうか。

また、大正期の文學の特色とも云うべき愛情の縛れは、明治期にはあらわれなかつた男の悲哀の姿として描かれている。たとえば、近松秋江の「別れた妻に送る手紙」「疑惑」、その他である。それは、寧ろ男の封建的な、消極的な感情が、新しく目覚めた女性に取残され、侮蔑される形であらわれている。それを、より際立つた姿で捉えたのが谷崎潤一郎の「痴人の愛」であろう。ここでは、女性の世紀末的なダンの姿デカと、情痴に溺れゆく男の溺愛とが描かれているが、男は恒

に、女性の氣紛れな心の量り難さと、技巧的な愛情の功利性に悩まされている。いわば、解放された女性の放恣な振舞いが、すでに男性の因襲的、保守的なエゴイズムを嘲笑うかに見える。

もちろん、谷崎、近松の描いた女性は、新しいモラルの正しい自覚の面ではなく、その自覚の恣なデカダンの峠を降る姿において描かれているが、兎も角、これまで男の自己的な心理に媚びることによつて、おのれを失つた女性が、反対に保守的な男性を悩まし続けるのである。そして、このような解放された女性の放漫な心理と姿態が、男の悲哀を焚附ける有様は、その後すくなくならず、小説のテーマとなり得たのだ。そうして、このような頽廢のなかにも、歴史の成長と、舊い形式の崩壊とが互に入亂れつゝ、避け難いものとして示されたのである。云わば、自己を時代の前面に押し立てて舊觀念を蹴りつけるのではなく、消極的に自己を防ぐ形で抵抗した姿とも云えよう。かようにして女性の解放が、舊いモラルの崩れゆく姿として亡びゆく反面に、正しいモラルの現実的な芽生えも、力強く育ちつつあつたのである。

2。

大正時代は、劃期的な職業婦人の進出の時代であつたことは前述した。一般産業界の躍進と共に

にショップガール、事務員の進出、その他喫茶店、カフェーの増加と相俟つて、それらの職場の女性が家庭の経済的な補いのために、或いは獨立への自覺に沿うて、都市から、田園から、工場へ、會社へ、デパートや喫茶店に、なだれ込んだ。

この時代、激しい生活の波と、思想の變轉に翻弄されながら、過去の傳統を失うと共に、おのれの個性の、自發性をも併せて消失し、船頭のない船のように生活の流れに随つて、人間的な誇りや價値の凡てを犠牲にした女性もあつた。しかも動物的に、何らかの悦樂に耽ろうとする憫むべき姿は「つゆのあとさき」の君江に具體化されている。そして、こゝで結局、大正時代の解放の勝利が空しい自己の喪失の姿となり了つたのであるが、そのような頹廢のなかにも、女性の生活力の旺盛さ、それに伴う功利心の芽生えは、證明されている。言い換えれば、君江のようなデカダン、生活との闘いを、女性の最も安易な面から切開いた一つの犠牲であつた。

そのような犠牲と敗北は、その職域の消費的な環境からも強く影響されたであらう。しかし、堅實な、正しい自主性と、理性的なモラルの發芽は、どのような環境のなかにも見られた筈であるし、殊に、多くの産業的な面に泳ぎ出た若い女性たちは、たとえば、「律子と瑞枝」の律子の如く、人生に對し、愛情に對して舊いモラルに盲目ではあり得なかつた筈である。律子も、生活の困難にはたわいなく倒れず、確かな理智の批判と自信を貫こうとした。たゞい彼女は熱さない環境のために、それを貫き得なかつたとしても、彼女に發芽した生活の理智は、「あらくれ」のお島のような生活力の旺盛な意思と寄合わされて歴史の發展のなかに生き延びたに違いない。それは、他の女性のなかに統一的に引繼がれ、成熟していつたに相違ない。その結果は、昭和の文學にあらわれる女性の、獨立的な歩みの逞しさともなり、或いは、愛情の知的な成長へと引繼がれ、受渡されてきたのである。

大正期は、なるほど個性解放の犠牲と、悲劇の姿態をも表現しなければならなかつたが、その犠牲は、犠牲のまゝに終りを告げたのではない。しかも、その犠牲と、頹廢と、悲劇のなかに、彼女らを苦しめた戒めや圍いが、彼女らの涙の抗議によつて次第に形を失いつつ、無力化されつつあつたのである。そしてそれとは反對の方向から、積極的な生活への突進が、彼女らの臍だつた自覺の眼を研ぎ澄まし、怖氣づいていた新しいモラルの試みにも、自信を振寄せたのである。思い上つた教養の悲劇、さむざむしい功利的知性で、愛情の裕さと、潤いを失う惨めさを味つたものも少くなかつたであらう。しかし、過渡期における發展性には、必ずそのような弱點が附纏うのである。過渡期における新しさや生長の芽が、つねに傳統と習俗の凝視から何か奇抜な化物のように、その非人間性を罵られるのも、そのような事情ゆえである。

われわれは、絶えず課される歴史の試鍊を、常に發展の方向に切開かねばならぬ。歴史を省み

るとは、そのような試練を發展に向つて生き抜く、一つの方法の探究である。大正時代の女性の悲劇と、新しい成長の萌芽とは、いかに變轉しつゝあつたか、それは、その後の、或いは今日の、切實な課題でさえある。われわれが、明治、大正という時代における女性の演じた凡ゆる姿態を、決して過去のものとして、最早すべてを克服し卒つたものとして、受取ることが出来ない所以である。今日の女性が、どのような發展の軌道におのれを托しているか。どのような軌道を進んでいようとも、それは明治、大正の何れかの軌道を、その發展性と共に、退歩性をも引継ぎ受渡されていくことは疑う餘地もない。そして最も注目すべきは、女性一般の明治時代の苦惱と發奮よりも、むしろ、大正の、解放された爲の頹廢のなかに、今日の發展の前驅的な兆候と、教訓的な暗示の數々が秘められているのではあるまいか。

附記 三代女性風俗の反映

明治時代の小説に、藝妓や娼妓が男の愛情の對象として美化され、特に藝妓が、洗練された女性風俗の支配的な位置を占めるもののように描かれたとすれば、大正時代は、女給のあらわれる小説が激増した時である。これは、昭和期初年のダンサーや、喫茶ガール、その後の職業婦人の描かれる小説が目立つのと同様である。しかし、その描かれかたは、それぞれに特徴があり、明

治文學にあらわれる藝妓は、愛情の洗練された表現の傳統を支えるものとして現われるのに反し大正時代の女給は多く、風俗の弛緩や混迷の一點景としてあらわれた。

昭和時代のダンサーや喫茶ガールが、女給と同じく、風俗の混亂する姿のなかに描かれ、舊い習俗からは抜け出したが、まだ何ら新しいものを身に著けず、たゞ無軌道にさ迷う轉換期の空虚な姿として表現された。しかし、職業婦人や、生産に加わる女性の増してきた昭和の生産的な女性群は、概ね新しい理性の芽生えとして、新しいモラルと、努力的な向上への憧れのなかで實生活と闘う姿で描かれたのである。

かように、文學の各時代にあらわれた職業に携わる女性の風俗的な表現の性格から眺めた場合も、婦人の生産、職業への参加が、いかに女性の向上に缺くべからざるものであつたか、その舊い意識からの目覺めと云い、健康な人生觀の芽生えと云い、凡て生産への女性の参加が色濃く齎したものである。

明治時代、花柳の女性が、モラルの傳統的な繼承者の意味から注目されながら、文學作品に、その美わしさを讀えたものは、泉鏡花、永井荷風ぐらゐのものであろう。

そして、大正期の女給も、實際には女給氣質という新しいモラルの芽生えがあつたのであり、その發生には、多くの社會、文化上の問題が含まれていた。

例えば、彼女らは農民の不況や結婚難から出稼ぎの場を都市の消費面に求めたのもあれば、一面では、浅薄な自由への憧れから、都市文化への見境のない幻想につられて誘き出されたものも、多くの女給に含まれていたのである。だが、文學作品には、大抵そのような發生の過程や、新しい氣質として鮮明に描かれたとは云えぬであろう。と、いうより、その消極的、頹廢の場面、家庭愛の敵としてあらわれた彼女らの新しい生活の認識や、愛情の變化には、それほど眼を尖らした作家がいまいである。

上述のような意味で、文學は現實の正しい反映でなく、その偏つた半面の表象に過ぎぬ場合がある。そして、ダンサーや喫茶ガールも、獨立な生活の擔い手として描かれず、大抵は男の愛情の新しい對象として風俗史的にのみ描かれ過ぎた。いわば、女給やダンサー等の、消費面の職場の女性が、文學のなかで、一人の全き社會人間としての存在が捉えられなかつたのだ。

しかし、生産的な面にあらわれる女性の多くは、ともかく一個の社會的な人間として、單に愛情の對象や風俗的な一現象としてではなく、生活の正しい建設者として、國家生産力擴充の積極的な擔い手として現われた。そうして、こういう女性の健康な姿の向上し行く有様が、文學的に描かれたということは、一般の女性が、男の愛の對象以上の範圍に解放され、その人間的獨立の可能が、より多く加わり、社會的な過去の偏見が拭い去られつゝあることを反證している。

第三章 働く慧智と新世代の創造（昭和期）

この章の主要な作品と作者

横光利一「寝園」

山本有三「眞實一路」

徳田秋聲「假裝人物」

中山義秀「美しき囃」

野澤ふみ子「煉瓦女工」

石川達三「母系家族」

石坂洋次郎「若い人」

丹羽文雄「東京の女性」

I 愛情の流浪から眞實へ

1。

大正から昭和へ移る過渡期の風潮として、アメリカニズムの氾濫を擧げるのは常識である。

大震災の壊滅の後を受けて、建築様式や、服飾や、その他生活の全般に亘つて、新しい改造が必要であつた時、逸早くその空虚に襲い來つたのは、アメリカニズムであつた。「モダン」の形容が、新奇の代名詞となつて巷に溢れ、銀座街頭には、いつかモガ・モボの濶歩が蔓延^{はびこ}り、ジャズの騒音と共にダンス・ホールも開かれた。ネオン・サインの瞬きと共に、大正から引繼いだカフエーも社交的な雰圍氣から、情痴の世界へと轉落したかに見えた。

* 昭和初年のアメリカニズムに感染して、新時代の幻覺を垣間見たような、淺薄な摩登ガールたちも新しいモラルの鮮明な逞しい行爲者として、文學的に形象されはしなかつた。と、云うのは彼女たちが、單に風俗的に新しいモラルの亞流を表現しただけで、その全生活を基礎から立直すこともなく、舊いモラルへの反撥を、上擦つた會話のなかや、或いは映畫的なボオズの表現で示すに止まつたからだ。つま

り彼女達は、新しい觀念の衝動に身振りや付けただけか、單純に感染して無自覺な流行病患者になつたかに過ぎなかつたのである。

また、大正以後繁榮を極めた映畫は、次第にアメリカものによつて、わが國娛樂習慣や生活の思惟に様々な混亂を與えた。「新興藝術派^{*}」という名稱のもとに集まつた作家たちに描かれた風俗や心理は、この間の消息を特徴的に傳えている。

更に又、武田麟太郎の「銀座八丁」その他の作品のように、當時の時代風俗を、銀座と酒場の相を借りて捉えようとした記録畫も少くない。丹羽文雄も、當時の酒場の女のモラルをテーマとした數々の小説を描いている。

* 「新興藝術派」という文學流派は、主としてアメリカナイズされた都市風俗や、都會人の近代的なニヒリズムの感情や焦燥を描いた。そして、この派および、その周圍から、モダニズム運動なる言葉が生れ、近代都市生活のアメリカニズムを新しい現象として、小市民の頹廢した風景を描いた。

昭和初年のアメリカニズム横行時代に描かれた小説の、新しい装いの女性たちは、モラルの喪失が新時代的に扮飾されて、舊い貞操觀に反撥するが如く誇張された。大抵は、その餘波を受けて、官能や、生理的な愛情の解放ならぬ放埒のなかに溺れるか、或いは新立たしい家庭主義への反撥だけで、新時代の幻想に浸ろうとした。

そして又、反抗や抵抗を新しい充實の方向に導き得なかつたための、安易な轉落の風俗が主として描かれた。このような頹廢の一面しか眺め得なかつたのは、當時の文學の眼の曇りでもあつただろう。現實では、已にこの時代、女性の生産部面への多量な進出があり、逞しい女性の堅實な精神の芽生えもあつたわけである。しかし、消費面にのみ眼を奪われた當時の文學はそれには氣附かず、轉落の一面にだけ捉えられたのである。

總じて昭和初年の小説にあらわれた女性は、プロ文學を別として、モラルの解體に痴呆を演ずるか、職場生活のなかに培われた慧智で、獨自な出發を始めるかであつた。或いは、激しい時代の變轉の響に自己意識を麻痺されながら、時代の流れのまゝに漂流し行くものも描かれた。そして、この時代、男女を問わず、自意識過剰の悩みや、心理分裂の破綻が特に目立つて、新しい作家たちの凝視を奪つた。横光利一の「寢園」に描かれる幾人かの女性の風俗にも、當時の、有閑的なインテリ階層の心理の分裂や生活意識の動搖が語られている。

「寢園」の女主人公奈奈江は、みずから愛なき結婚に飛込み、その結婚の矛盾に敗れる女性として描かれている。

彼女には、梶という愛人があつた。梶は、木綿問屋の主人であるばかりでなく、インテリで、濫い好みの通人である。彼にもまた、奈奈江は行摺^{のまや}の他人ではなかつた。だが奈奈江は、梶に對

する詰らない意地から叔父の勧める仁羽と結婚し、彼の失望を見返してやろうと考える。既にこの時、彼らの生活を遊戯的に考える心の芽生えがあつた。特に奈奈江は、人生を輕蔑して、輕い賭事のように結婚を考え、實生活を出來心の意地に左右させて了うのだ。

しかし、日が経つにつれ、愛情の交流のない仁羽との結婚生活が忌むしくなり、前にも増して梶を慕うようになる。梶も、奈奈江との些細な行掛りからそうなつたのだとは云え、奈奈江を忘れることが出來ない。たまたま猪狩を催した折、仁羽の寸前へあらわれた猪を射とうとして、奈江は誤つて夫を射つ。幸い命は取止めるが、奈奈江は夫の助かつたことを心から喜ぼうとはしない。やがて健康になり、自分にとつて再び暗い生活が始まるに違いないと考えると、彼女は、順調な経過を辿る良人の肉體が怨めしかつた。一時は、見舞に來た梶の後を追おうとも考えるが病床にいる仁羽のことを思つて踏みとどまる。

そんな折、株の暴落から梶の會社は破産する。奈奈江は梶の苦境を救おうとして金を用立てるが、間もなく手紙を添えて送り返してくる。これは最初、かの女が梶の氣を惹くために仁羽との結婚話を打明けたとき示されたと同じ彼の片意地な冷淡さの現れなのである。だが奈奈江は、自分の好意を受けなかつたことを憤る代りに、反つて彼の許に走ろうと決意する。

夫の全快祝賀の射撃大會を明日に控えたその前夜、送り返された金と手紙とを懐ろにして彼女は家出する。

は家出する。

これは奈奈江を中心にして見た「寢園」の粗筋だが、ここで窺えるように、彼女の結婚生活が最初から幸福でなかつたことは事實である。

妻の愛情より、獵犬と銃を大切にする夫、戀人に傾いてゆく妻の動作より、射撃場で落すクレーの數の方が氣になる、こうした夫と生活を偕ともにすることが、奈奈江にとつて幸福であらう筈はなかつた。梶に對する依怙地な氣分から仁羽を選んだとはいへ、炳あきらかに誤つた結婚だったのである。彼女は、愛情のない結婚生活の慘めさを痛感する。これは、夫と愛兒とを棄てて戀人の許へ走つてゆく「アンナ・カレニナ」の心情にも通ずる女の悲劇の一つであらう。しかし、彼女の場合は、初めから梶と結婚することが許されていなかつた譯でない。自分の氣持ひとつで、誰とでも結婚の出來る自由な立場にいたのである。してみると、彼女が梶を選ばずに仁羽と結婚したことが、そもそもの誤りだつたのである。しかも、仁羽との結婚を叔父から勧められたと打明けたのに對して、「それも良からうじやないか」と素氣なく出られた、という只それだけの理由で梶との結婚を思いとどまつたのである。

この驕慢な彼女の性格の破綻は、病院に擔ぎ込まれた夫の傍らで泣き入つている時にさえあらわれている。

「あんなに好い良人であつた仁羽が、毎日毎日自分に嫌われて、そしてとうとう最後に自分に射られて死んでいくのだと思うと、奈奈江は慄然とした氣持であつた。もし仁羽が、もつと自分に愛されて死んでいくものだつたら、まだしも自分の罪は軽いであろう。けれども、それが殆ど一度も自分に愛されずに、あんなに無慙に死んでいくのだと思うと、奈奈江は耐えられなくなつて泣き出す」のであるが、涙が乾かないうちに、「奈奈江の心底から、また梶の姿が、うるさく悪魔のように浮き上つてくる」のである。

自分から誤つた結婚をしながら、夫を愛せない自分を、飽くまで正當なものと考えている彼女の、この結婚生活に對する驕慢な態度には、當時の有閑的な生活層の女性に屢々見受けられる、不遜な人間態度の一面を最もよく表している。これは、この小説に點景人物として現われる藍子という女性の、働くということ、何か遊戯のように考へている考へ方にも共通する生活心理でもあるだろう。この點では、確かにこの小説に描かれる女性の立像には、富裕な生活に生きる女の倫理觀や生活意識などが、鮮やかな輪廓で語られている。そのみではない。彼女は驕慢な性格の他に、近代的な心理の分裂に捉われている。生活の眞理を投遣りな好奇心の眼で弄ぶ射倖心がある。

たとえば、初めの結婚談を男に軽くあしらわれたという理由で、反抗の氣勢をとり、好まぬ結

婚に身を投じたのである。その浮薄な反抗と冒險を好む心のなかに、彼女の世期末的な虚無の深淵が覗かれる。結婚は遂に、偶然の心理的賭博の如く彼女に取扱われるのではないか。この傾向は、對象の男性の側にもあつた。舊い觀念の無慙な崩壊に出遭い、しかも新しい精神の目標が喪われた時、このような浮薄な好奇心と、氣紛れた感情の波によつて人生を愚弄するような傾向に溺れやすい。いわば、ニヒリズムの享樂である。瑣末な感情的偶然に、人生の鍵を握らせるのである。

しかし、ここで重要なのは、いかに描かれているかではない。描かれた女性が、いかに行動しているかが問題なのである。従つて奈奈江の場合も、一人の女が男を對象として如何に生きたかが問題になる譯であるが、この點では彼女は、初めの過失に目覺め、次第に自分自身の自然の要求に生きようと跳く女性に成長したと云えるであらうか。誤つた結婚に出發したとはいへ、彼女は與えられた生活の場に安住もしなければ、また人生を諦めてもいない。自分の求める生活を、犠牲を拂つても探そうと努力している。梶との新しい生活が、必ずしも彼女を幸福にしてくれるかどうか、それは分らない。分らないけれども、彼女には、それ以外に生きる路は無かつたのだ。誇りと魂とを傾けて暮せる生き方が、梶との生活を離れて考へられなかつたのである。それは最早や道德の新しい書替をさえ強いる勢いであつた。優柔不斷の、心理的な動機を辿りながらも、

兎も角、おのれ自身の眞實への途に門出せざるを得なかつたところに、彼女の歴史的意義が宿るのである。

2。

分裂する二重の精神に揺動かされ、初めは人生を好奇心に任せなければ、その過失を匡（たゞ）そうとした果、おのれに忠實な生活と人生とを求めて、奈奈江の新生活が始まるのであるが、これと同じ受難の路を攀登つてきた女性に、「眞實一路」の睦子がある。

彼女も、誤つた結婚によつて、その生涯を流轉の運命に曝さねばならなかつた女性である。

女學校を出たばかりの頃、彼女には親にも知らせない一人の愛人があつた。處がその愛人は、丹毒に侵されて、突然病死してしまふ。愛人の入院中睦子は、見舞に行つたり親身になつて看病したりするので、二人の間は兩方の家庭にも知れるのだが、愛人の死後、睦子は胎内にその胤を宿していた。そこで睦子の兩親は、先方の親たちにその子供を認知してくれるように頼むのであるが、息子から一言も聞いていない話を、俸の子供として認めることは出来ないと云つて突撥ねてくる。致し方なく睦子の親たちは、自分の家で以前から學資を出したり、就職の面倒を見てや

つたりして世話をしてきた守川義平という同郷の青年に、一切の事情を語つて、睦子を引受けてはくれまいかと頼み込む。義平は、睦子の家に入りするようになつてからというもの、心ひそかに彼女を戀していた。しかし、それはどうい縁の無いものと諦めていたところ、思いがけない依頼なので、彼は即座に引受ける。一つは、今迄の御恩返しという氣持も働いて。

しかし睦子は、初めからこの縁談を好んではいながつた。先方が胎内の子を認めてくれないなら、いづそ水に飛込んで、胎兒と一緒に愛人の跡を追おうとも考えた。が、引止められてそれも出来ず、自分だけで子を育ててゆく道は立たず、結局、兩親に諄々（くづ）と説得されるままに義平のところへ嫁ぐのである。こゝに生ける人形の生活が始まるのであるが、然し義平は、「寢園」の奈奈江の夫のような妻と家庭を特別念頭にもしない男とは違つて、見も知らない人の子を引受けて、いやな顔一つせず、産婦の面倒やら赤ん坊のおむつの世話まで、熱心に氣を配つて心を盡すのである。

やがて丹毒で死んだ愛人の子も成長し、つぎの子が睦子の胎内を離れた頃、突然彼女は家出する。

十年の歲月は流れた。

上の子（志津子）は、縁談のかかる年頃になり、次の男の子（義夫）も十になる。二人の子の

母であり、自分の最愛の妻である睦子に家を去られてから義平は、男の手一つで一心に二人を育てたが、志津子と違つて男の子は、学校の成績が悪く、氣質も拙く、女親の愛情に接しないことから生ずる心の空隙が、情ぶかい姉や父の手厚い勧めにも拘らず、

義夫を絶えず苦しめるのである。和やかな食膳へ向つてゐる時でも、「その和やかな温もりのなかに、義夫はともすると得體の知れぬ隙間を感じた。ひよいと、繪のないフィルムのようなものが、一齣、二齣、紛れ込んでくるのである」と、作者は義夫少年の心理を寫しているが、この心の空隙が、いつとなく義夫を曲らせてゆき、或る時は一寸した小言を聞いても、風の強い夜だというのに家を飛出し、暗い野良なかをさ迷い歩いたり、或る時は、ぼんやりと居間に坐つて外を眺めていたりするのである。

吾と來て遊べや親のない雀

少年の日の一茶は、このように空虚な心情をうたつてゐるが、義夫は、自分と同じ年頃の子供の言う「お母さん」が、必ず何處かにいて、ひよつこり自分の面前に見られてくる事を信じていた。だから父や姉たちが母は死んだと言つて聞かせても、それを本當にしなかつた。

志津子は、弟のこの母に對する強い思慕に動かされて、叔父と相談の上、母に戻つて貰うべく、秘かに睦子の許を訪ねる。十年前に家を出て行つた睦子は、場末に小さなカフェーを經營して、

年下の愛人と棲んでいた。荒んだ母の生活や物腰を眺めたとき、志津子は、咄嗟に望みのないことを感じた。叔父から話を持出したが、豫想にたがわず母は受け容れなかつた。

「そりやあの子は、あたしの腹を痛めたには相違ないが、あたしはあの子を生みたくつせ生んだんじゃありませんよ。宗ちゃんも知つてゐる通り、あたしは生まないで済むものなら済ませたいと、どんなに思つたか知れないのに、やれ世間がどうだの、警察がどうだのつて、あの人が無暗にうるさいことをいうから、仕方なしに身二つになつただけで、そういう因縁つきの子だから、あたしやあの子にはちつとも愛情がないんだよ。もと／＼あたしつてものがないこととして育てる約束で生んだのだから、今更になつて母親がどうのこゝろのといふ責はないんだよ」

こうして睦子は、一旦は素氣なく斷つて歸すが、隅田（愛人）との仲が思わしくなくなつてくるに随つて、子供に對する愛着が日毎に募り、義夫の母である自分が、ますます深く自覺されてくる。

たまたま、愛人の後を追つて上總の大原に行き、その海岸で見知らない少年と釣をしている隅

田を発見するが、一緒に宿へ歸る途中で、迎えに来た志津子と逢い、初めて眼の圓らな可愛い其の少年が義夫であつたことを知る。志津子たちの避暑に来ていたことを知つた睦子は、隅田を急立てて、その翌日の汽車で東京に發つた。母と逢つていながら、母であることも知らない義夫の眼の届くところに何時までもいることが、彼女には怖ろしく思われたのである。逃げるように東京に戻つては來たが、臉の奥に深く刻まれた圓らな少年の眼が、忘れ難く彼女の網膜に焼附いてゐた。

睦子が子供の愛に傾いてからというもの、隅田との仲は一そう險惡になつた。そんな折、義平は喘息が嵩じて危険に陥つていた。睦子は、この機會を逃しては、義夫の母になれる日が再びあるまいと考へて出かけるが、義平の強硬な拒絕に遭つて、逢うことも出来ずに歸される。

義夫が病院へ入れられたのは義平の死が知らされて間もなくのことである。睦子は、取るものも取敢えず駆けつけた。親戚のなかには、彼女の附添うことを咎める者もあつたが、志津子の計らいで許され、初めて親らしい働わりで義夫を看護する。やがて義夫も全快し、睦子は志津子の口添えで一緒に暮せる身になるが、呼び馴れない「母さん」が、義夫にはどうしても口に出せないものである。

睦子は、何よりも先ず義夫の母であることに努めた。十何年かを別々に暮らしていた親子の距離

を、義夫のためばかりでなく、母親として自分のためにも縮めようと思ふ。しかし、睦子の努力にも拘らず、義夫は依然として盗みをし、學業も不出來だつたのである。彼女は責任を感じた。家庭を棄てた女の、當然負わねばならぬ恐ろしい結果を、今更の如く義夫の上に見た思ひであつた。かくて、家庭の母として、彼女は再び出發するのであるが、たまたま訪ねて來た見知らない男から隅田を訴えるのだと聞かされ、心配のあまり彼を訪れるべく家を出る。

熱のない光を發明しようとして、いろんな人たちから資金を融通して貰つていた隅田は、研究の結果が思わしくないと資金難から、拔差ならない羽目に陥つていた。こうした状態を見せつけられた睦子は、子の母となるべく決心した昨日までの努力を、聊かの反省もなく拋棄して愛人に盡そうと考へる。

義夫の許へ戻らない睦子を心配して叔父は出かけるが、愛人のために身を投げ出そうと決意した彼女には、子のために翻意する餘裕など残つてはいなかつた。むしろ、そうした愛人との苦しい生活のなかに、おのが全身を埋めようとしているかに見えるのである。

「ほー、宗ちゃん、こんな態になつても、と思つてゐるのさう。そりやあたしだつて、好きこのんで打たれたり、蹴られたりしてゐる譯じやありませんよ。あたしや何とかして、

あの人をものにしたいと思つてゐるからさ。あの人は短氣だけれども、根は本當にいい人なんだよ。そうして、いい頭を持つてゐるんだから、どんな事をして、あの人を世に出さなくつちやならないと思つてゐるんだよ。そう思つてゐるから、あたしはどんなに打たれなつて、蹴られたつて、いつも平氣さ。あの人がそういう事をする時は、あの人が一番苦しんでゐる時なのよ。あの人の苦しみに比べれば、あたしの苦しみなんか何でもないわ。あたしはあの人のしたい放題にさせてゐるの。それであの人の虫が納まるんなら、それであの人にいい考えが湧いて来るんなら、打たれる位お安い御用じやないの」

睦子がいなくなつても、義夫はそんなに不思議には思わなかつた。小母さんは姉さんや四谷の叔父さんと喧嘩をして出て行つてしまつたので、もう歸つて來ないのだと云うことを知つてゐた。歸つて來ないとなると、何かしら淡い寂しさを感じないではないけれども、居てくれなくては困るという程、彼は愛着を持つてゐなかつた。姉さんだけよりも、小母さんがいた方が時にいい事もあるにはあるが——位の、功利的なものだけだつたのだ。

「お母さんだなんて言つたつて、やつぱり、そうじやなかつたんだ。」

結局、睦子がいなくなつて、彼の頭に最も深く刻み込まれたことはこれだつた。この小母さん

の睦子は、經濟的破綻と、研究の行詰りに苦しんでゐた隅田に、心を籠めて盡してゐたのである。

やがて破局がきた。隅田は睦子のいない隙を狙つて自殺した。彼女も後を追つた。

かくて彼女は、その陥らざるを得なかつた苦境と當然の没落に身を滅ぼさねばならなかつた。しかし、それは、家庭と家族に不幸を降した母親の破滅の姿ではなくして、おのが悦びを貫くこととのなかに、女の眞實を求めた女性の敗慘である。彼女も幾多の迷いや、ふるさを振棄てることも出來ずに動搖はする。しかし、そのような動搖の度に、實生活から新たな反省を受け、おのが眞實への強い意志を撓めなかつた。そのように強い眞實への意志を、ともかく積極的な行動によつて實驗したところに、彼女の敗慘に畢る生涯の意義がある。

彼女は、愛人の屍の上に自決する時、志津子に宛てて次のように書き遺してゐた。

「義夫のこと、くれぐれも頼みます。こんな事になつたあたしを、母と呼ばせることは義夫に可哀相です。守川が言つたように、母はどこまでも昔死んでしまつた事にしておいて下さい。、女が母親になることは何でもない事です。そんな事は、どんな女にだつて出来ることです。でも、眞の母親たることは、なかなか出来ることではありません。この事は、よく／＼思案して下さい。あなたに言い残したい事はこれだけです。」

このように彼女は娘に對し、愛のない結婚から生ずる女の不幸を暗示している。愛する人と結婚の出来ないということは、子供の眞の母親となることも出来ないと伝えられている。これは、愛兒セリイジャのよき母親でありながら、ウロンスキイの許へ走らずにいられなかつた、トルストイの「アンナ・カレニナ」の心情をも象徴するものであろう。

トルストイが「アンナ・カレニナ」で描いた女主人公アンナは、「善良で、立派な人間」の假面の下に、底知れぬ虚偽と打算の眼が光つていゝという風な夫カレニンに耐えきれず、ウロンスキイの愛を求めて家出する。その偽りの耐え難さがアンナにとつて、どのようなものであつたか、次のアンナの告白によつて知られよう。

「われわれの生活は、以前の通りに進まなくてはならないのであります。」と、彼女はまた、手紙(夫よりの)のなかの文句を想い起した。「この生活は以前でさえ随分苦しいものだつた。殊に近頃は恐ろしいものだつた。それだもの、この先はどんなものになることやら? しかもあの

人は、何もかも知つているのだ。わたしが呼吸することや、愛することを後悔することの出来ないのを知つているのだ。また、あの人そんなことをして見たところで、嘘と欺きの他には何一つ生れて來ないことを知つているのだ。でもあの人には、何時までもわたしを苦しめることが必要なのだ。わたしはあの人を知つている。わたしはあの人が水の中の魚のように嘘つきのなかを泳ぎ廻つて、悦んでいるのを知つている。だからわたしは、どんなことがあつても、あの人に、そんな悦びを興えはしない。わたしは思いきつて、あの人がわたしを包み込もうとしているあの虚偽の蜘蛛の巣を破つてやる。どうなつてもいゝ、なるようになるがいゝ。どんなものだつて、虚偽や、欺瞞よりはましだ。」

「だけど、どうして? おゝ神様! おゝ神様! わたしのようにこんなに不幸な女が、いつかこの世にあつたでしようか?」

以上の告白は、彼女が愛人を求めて家出した後、再び家庭に歸るようという夫からの手紙を憶い出して語る言葉である。彼女は何より、嘘と偽りの生活そのものを嫌つていた。それ故に、夫の寛大な愛と宥しに對してさえ、偽りの心を眺め、「わたしはあの人の善行に對して、あの人が憎らしくてならない。」と言ひ、「あの人が、わたしなどはあの人の爪にも値しないことを知りなが

ら、矢張りあの人を憎まずにはいられないのです。わたしは、あの人を寛大なのに對して、あの人を憎むのですわ。そして、わたしは、もう外には、どう仕様もありませんの、たゞ……。」と、狂亂の姿で彼女の心理は欺瞞に對する憎惡に驅立てられ、遂には、その憎惡のためにおのれを失いそうになる。

そして一方、彼女は全身の救いを求めて走つたウロンスキイにも満足できなかつた。彼もまた、社會的な欺瞞と形式主義から遁れられぬ人であることを知り、素朴さのない歪められた姿を、アンナは確かめねばならなかつたのだ。かようにして、アンナの心理は愛憎の兩つに分裂してゆく。夫カレーニンの態度の偽りを想い描くと、ウロンスキイへの限りなき愛情を煽り立てられる。逆に、ウロンスキイを嫌惡し始めると、カレーニンの家庭に歸つて忠實な妻になることを刺戟されるのであつた。このような彼女の充たされぬ心理の不満と二重の分裂のはて、ついにウロンスキイとの愛情をも振棄てて、すべての欺瞞多き世界から脱出したい慾望に導かれてゆくのである。アンナは、欺瞞のなかに愛情を育てることは出来なかつた。なぜ素朴に、人と人とが表現と心理の別け隔てなく眞實を語り合えぬのであろうか、この疑問がアンナの愛の放浪を餘儀なくせしめたのである。かくして作者トルストイは、アンナを、彼女を取巻く偽り多い牢獄から解放させる。すなわち彼女は、ついに鐵路の上に、その傷ましい苦悶の生涯を閉じるのである。

アンナの辿つたこの人生的な足取りのなかには、隅田の屍に折重なつて自決する睦子の、傷ましい流轉の過去が疊まれている。ウロンスキイは、アンナの後を追いはしなかつた。追わしめる必要もなかつた。けれども、アンナは自ら選んだ人生を自ら處決した。虚偽の世界に耐えきれずして、自ら突き進んだ世界も、現實的な不幸を癒すものでなかつたとはいへ、そこに幸福の幻影を眺め、自らの生涯を進んで犠牲の坩堝くわつぽに投じたのは、眞實の人生に對する感動のためであつた。同じことは、睦子の生涯にも言えるであらう。

スタンダールは、「戀愛論」の初めに言つてゐる。

「眞面目に發展してゆけば、すべてが美の性質を有つようになるこの戀愛感情」と。

これは愛情の眞實を求める人の、また人生を深く理解しようとする人の、強い反省の言葉であらう。これは單に、學問や教養の問題ではない。生の意義と悦びの本能を、人間生活のなかに探らうと努力する人へのみ理解できる言葉である。

多くの人々は、實生活の足取りの道筋で、この言葉のもつ人生の意味を、いかに徐げものとして、拒み續けてきたと云うのであらう。女が歴史の長い過程で、強いられた盲目の愛情ゆえに、男の虚偽ばかりでなく、おのれの偽りの感情をさえ意識し得ずに耐え忍んできた。と云うのは、おのれ自身の誠實な觀察の力さえ女性に惠まれなかつたからである。しかし、たとい、それに氣

附いたとしても、多くの女は、自身の無力を悟つて傳統の塗り替えには手を拱き勝ちであつた。その弱さが、いかに多くの犠牲を生んだことであろう。壓し殺し飲み込むことを傳統とした愛情が、何かの動機で目覺めた果に、どう破綻するか、そういう教訓をアンナや睦子は死によつて象徴したのではないか。

鐵路に生を畢えたとはいへ、アンナはおのれの心の偽りは打開しようとして跳いた。睦子は？ 彼女も、律義な夫との生活を清算したところでそれをした。それが男の律する道徳から異端視されることであつたのみでなく、おのれの確固たる信念の結果とも言われ難いかも知れぬ。だが、彼女は、ともかく眞實の生き方と、悦びの人生に辿り着こうとする跳きに身を委ねた。委ねざるを得なかつた。それは功利的な愛の探究ではなく、愛の眞實を探ね歩く巡禮の如きものであつた。

眞實一路の旅なれど

眞實、鈴ふり、思い出す

——北原白秋「巡禮」より——

3。

「眞實一路」の睦子にしても、アンナ・カレニナにしても、男との愛情の眞實に飢えた餘りに、母性としての役割を完う出来なかつた悲劇の女性であるが、中山義秀の「美しき囀」の乃武子も、男との愛情の破綻から母性愛の畸形に陥る女性として描かれている。私生兒を抱いた彼女は、一般の母の如く授けられたるものとして子供を眺めなかつた。父のない子を産むことは、彼女の都合には「仕方がない故」であつた。従つて、生れ出する者のために、母としての悦びを悦びとして享受することは、とうてい彼女には出来なかつたのである。

この母として登場する女性乃武子は、尋常三年で學校を退き、母の店で賣子となつて働いた。藪唄みではあつたが、賢かつた彼女は、商賣もうまく、賣上を引上げては母を喜ばせた。だが商賣が思わしくなかつた處から、その後、一家は轉々と住居を變え、酒の小賣なども始めてみたが、望みはなく、乃武子の腹違の兄が朝鮮で鐵工場を經營しているのを眞似て、父は資金を掻集めてやつてみるが、やはり思わしい結果は得られない。こんな情態だつた故、乃武子は姉夫婦の許で女中代りに働き、二年餘りを夜學にも通わせて貰うが、物心がつく頃から勉強がしたくなり、姉

夫婦にせがんで上京し、衆議院幹長の邸へ女中に住込んで薬剤師になろうとして勉強を始める。

だがその時分はまだ、女性にその資格が與えられてはいなかったたので、彼女は方向を轉じて看護婦にならうと考える。乃武子の母は、他郷で苦勞しているのを氣に病んで、故郷へ彼女を連れ戻すが、貧しい家には長く居たたまらず、今度は長兄を頼りに海を渡つて朝鮮に行く。

このような流轉のうちに、彼女は婚期を失し、獨り暮して三十の聲を聞く身となる。こうして誰からも愛されることもなく姥櫻となつた彼女は、硬骨漢をもつて自任する老醫學生下枝三省と、初めての戀を取交すのである。乃武子のような女を狙うところに、彼の奇抜な一面もあつたのだが、彼女は普通の男性が眼を著けるような女性ではなかつた。また、男から容易く騙される女でもなかつた。

彼女の兩眼の鋭さは、娘時代から變りはなかつたが、癖のひどい縮れ毛を銀杏返しに結つて、藪睨みの眼を据えた風貌は、一見して怖れを抱かせるに充分な姿であつた。だがそれにも拘らず、年をけて苦勞を積んでいた彼女は、結婚を條件としない限り、男の誘惑をも突張つていたのである。

彼女は、下枝を愛していたが、決して油斷はしなかつた。處で下枝の方もまた、結婚の意志など毛頭なかつたのである。これが乃武子の、初めて知つた戀の、それに向う態度だつたのだ。こ

うした戀愛は、近代に生きる男女の、一つの哀しき闘いの姿であるが、しかし、ここでもまた女は脆い敗れ方に終つてゐる。それは身構えてゐる女の姿勢のなかに、本能的な弱點が潜んでゐたからでもある。

「まアあの月」

そう叫んで乃武子が、思いに堪え兼ねたように立停まつた後から、下枝の劍道で鍛えられた腕が絡まり、不意の接吻を受ける。それにしても女心は不思議なものである。いちど男に許してしまふと、もう他愛がなかつた。そして懐妊するのである。

下枝は間もなく、學業を卒えて歸郷した。彼女は、その留守に博子を産むのだが、十三日目の午ちかくになつて、新調の背廣服に身を固めた下枝三省が、酒氣を帯びてやつて來た。そして乃武子の床脇に坐つて言うのである。

「どうだ乃武子。お産の時出血はなかつたか」彼は密かに、この女が出血多量で死ぬのを期待していたのであらう。だが斯うして、嬰兒と枕を並べているところを見ると、それも望みはないと思つたのか、さつそく五十圓の金を渡したのである。彼女は、その藪睨みの氣性にも似合はず、圖太い男の心膽を今更の如く悲しんだ。

「貴男は今後どんな華やかな御家庭でも望み通りお出来になりましたが、一度過まつた女の身は、もはや取返しはつきません。私はそう思い諦めて、たとえ乞食しようとも、我が子の爲、仕合せな境遇を作つてやる積りです」そういう女の言葉に返事もせず、言うだけを聞くと下枝は、さつさと歸つて了うのである。

このような逆境を背負つて、小説「美しき闇」の母乃武子と娘の博子の女性像は出發するのである。

山本有三は昭和の初めに、「嬰兒殺し」のなかで、母が生きたために子を殺す女土方の生き方を描いているが、乃武子もまた同様に、子を殺して自分も死のうかと考える。そうすれば、自分が亡びると同時に、下枝の前途も減茶々々になり、生涯世の中へ顔を出すことも出来なくなるに違いない。と、幾度か思ひはしたけれど、自分ばかりか、子の命まで道連れにすることが忍び難く思われて、結局、産後の體が元通りになるのを待つて、下枝から受けた五十圓を資本にして下宿屋を始める。

年老いた母と嬰兒を抱えて生活戦線に飛出した彼女は、藪覗みの大きな兩眼を一そう光らせ、性質も、それに應じていよいよ辛辣味を加えた。後日に至り、南海第一の都會に、看護婦會を設

立して女西郷と評されるようになる彼女は、こうした境遇のなかに、母として女として生き抜いてゆくのである。

一度は生命保険の外交員と簡単な夫婦生活を営んでもみるが、程なく自分から良人を追い出してしまふ。最早おとなしく人妻の役を努めていられるような女ではなくなつたのである。自分の仕事を維持するためには、自分の心を欺き、感情を殺すことも平氣だつた。月収は五六百圓に上り、二三丁先への外出にも自動車を呼び、旅行には一等船室へ納まり、財布には金を一ぱい詰め込んで持つて歩いた。

醫學生下枝三省に情を竭した年増女の愛慾は、一轉して見榮と物欲の典型と化したのである。要するに彼女は、女ひとりが逆境に抗して生きるためには、斯うならねばならぬということ、試すかのように己れの過去の半生で物語らせているのである。

この強い母親の許で育てられる娘の博子は、この母親からこんな子が産れたかと思われるような、優しく初心な性質であつた。

ミスKの美人投票には當選するし、市賓の名士に花束を捧げる令嬢使節には選ばれるし、母とは別な意味で、彼女の存在は名物になるのである。

この博子が、最初に得た智慧といえ、何事も母の言附に従つて甘えてさえいけば、母はいつも自分を可愛がつてくれると云うことだつた。博子は、母に許されなければ人の愛にも押れず、人に近付きもしなかつた。全く獨り立ちの思慮と分別とを缺いた蠟人形のような人間として出来るのである。こういう彼女のところへ、或る醫大教授から婿の話が持込まれる。家族七人もある家の長男だが、家族の面倒と、學位を獲るまでの研究費さえ出してくれれば、養子として先方も承知するからと云うのである。捨てられた下枝三省を見返してやろうという忘れ難い意地や、持前の見榮も手傳つて乃武子は、眞輔という教授の話の醫大生を博子の夫に定めてやるのである。

博子は、母の定めてくれた夫へ忠實にかしずき、朝は良人より早く目覺め、良人の枕元に新聞と煙草を揃えて置くし、彼が起きれば、女中の手を煩わせるまでもなく、一切の身の廻りへ手落なく心を配つた。しかし眞輔には、どうもこれが妻の眞情だという氣がしなかつた。「妻」の型を眞似たお嬢さんのままとのようにはか思えなかつた。彼女は、眞輔を見ると何時もにくくして愛想がよく、どんな些細なことでも逆らひはしなかつたが、もし彼が、彼女の夫でなかつたら、男としての眞輔に何の愛着も興味も持ちそうに思われなかつた。博子は、そんな女だつたのである。

彼は、たまたま寢物語りに、博子にこれまでに戀愛したことがあるかと聞いてみた。

「そんなことありませんでしたわ」

だが假りにもミスKに擧げられた位だから、思いを寄せた男もあつただらうと言うと、「それは少し位あつたかも知れないけれど、御存知のようにお母さんが嚴格だし、私だつてそんな男達さげすんでいたの」と言うのである。このような言葉にあらわれた彼女は、單に浮薄な戀愛心理に捉われなかつたと云うだけでなく、愛情そのものに對する無關心や、他力本願的な依賴心を露呈している。それ故に、「戀愛など輕蔑しますわ」と言つて、母の指圖と感情を通してのみ世間を眺め自分を決めてゆく外はなかつた。

自分を一個の獨立した人間として、何の要求も持たないこの従順な女を見て、眞輔は或る失望を感じ初めるのであるが、しかし、その眞輔もまた、一萬圓くらいは大丈夫と腹算段をしていた結納金が、二千圓で事切れとなつたのを憤慨して父が怒鳴り込んで來ると、一言半句も言譯の出來ぬ輕薄才子なのである。そして彼は結局、妊娠した博子を利用して家を出るのだが、一ど博子を棄てて出た眞輔は、彼女に母を棄てて來いと勸めるが、彼女は母を棄ててまで夫の許へ行こうとはしなかつた。それぞれその親たちの打算的な投機心によつて結ばれ、離されてゆくのである。

このようにして、美しく従順な博子は、母の辿つたと同じ運命に曝されるのである。一方、乃

武子を棄て去つた下枝三省は、東京の中心にある帝都ビルに四室を占めて診療所を開業し、美容手術において、斯界の權威者たる名聲と數十萬の資産を積んでいた。乃武子母娘は、娘の父であり母の昔の戀人であつた下枝を頼つて、今迄の生活地盤を捨てて上京する。

ここでこの小説は、結末を告げるのであるが、ここでも亦、女の生活に對する異常な努力にも拘らず、或は物欲のため、或は無意思のために、愛や家庭や、そして己れ自身の人間性をさえ破壊し去る實例を示すのである。たとえば、普通には子に對する愛情が、そのまゝ女の悦びとして人生を形作つてゆく筈であるが、乃武子は、どこまでも女の習性として子の責任を負おうとしてゐる。つまり、妻の役目を持たぬ女にとつて厄介な荷物ではあるが、自分が産んだ故に仕方なく責任をも負おうというのである。この間の消息は、下枝三省との戀愛の動機にも窺えるし、また娘の結婚に對する功利的な打算からも考えられる。いわば、彼女は、物欲と打算から人生や女の幸福というものを割出そうとしていたのである。

また、娘の博子は、「素直で純潔で、涙もろく、言語動作のひどく子供らしい、言つてみれば、今の世には稀らしい傀儡のような可憐」な女性だが、それ故にまた、自分の結婚に對しても、また自分の人生の選擇についても、何一つ自發的に考えようとはしなかつたのである。

「母の教えと母の懐ろの世界以外に就いては何も知らぬ、すべて母の力に頼り切つて、母の命するままに動く」ことが、彼女の信仰であり、人生だつたのだ。物欲と打算と無知に閉された野生的に強烈な性格の母親の許で、彼女は、思慮もなく、分別もなく、行動もなく、悦びもなく、しかし、満足な氣持で生きる女であつた。だが、満身に思つていたこれらの一つ／＼が、結局、彼女の弱點として、やがては破滅の深淵へと導く結果ともなつていたのである。

同じことは乃武子にも言い得る。家庭から出た彼女は、對社會的なことでは、藪尻の眼まなこと同様に鋭く聰明で、「敷島看護婦會あつての自分達の生活だということ、そしてその心得によつて萬事自身を處してゆくことを誰よりも明瞭に承知して實行」する女である。だから乃武子は、「會の名をあげてその名譽を維持するためには、自分の心を欺き、感情を殺すことも平氣だつた」のである。だが、この物欲と打算によつて計量された彼女の生涯は、またそれ故に破滅に沈まねばならなかつたのである。つまり、眞の愛情ある知性と意思の缺落が、人間としての彼女を、女としての彼女を、救い難い化石として葬つてしまつたからである。

いわば、彼女には、女を女として正當に理解してくれる人よりも、經濟的に女を安心させてくれる良人の方が望ましかつたのだ。愛情はなくとも、重い月給袋を實直に手渡してくれる男性が必要だつたのだ。従つて經濟的な條件を有つていない男性は、愛情の對象たり得なかつたし、彼

女の感情を膨らませてもくれなかつたのである。このように、人間感情をも彼女は金銭によつて打算している點で、現代に生きる女性の一般的性格の反面を暗示している。彼女の有つている頑固な保守性と、愚鈍な物欲根性とは、思い出すのに困難な女性像ではないのである。

母乃武子が、おのれの人間性を殺してまで打算的にならざるを得なかつたのも、その初めに、男の刹那的情熱に襲われ、冷酷に彼から振り棄てられたところに起點がある。愛情に恵まれず、自立への過程を辿ることが、いかに女性の人間性破壊の傾向を生むか。

或いは、娘博子の受動的な、他力本願的な、エゴイズムに倒れゆく姿は、今日の生活意欲に旺盛な女性の間において稀有な存在ではあるが、このような性格のなかに、過去の女性の背負わされた傳統の名残が、最も悪質に凝結しているのを知らされる。男性の倫理的責任について、女性の自立と人間性の受難について、或いは、頑迷な因襲が女性判断力を喪失させることについて、この二人の生活過程から訓えられるところは尠くない。

4。

戀愛と生活との關係を考ふるについて、多くの課題を含んでいるのは、徳田秋聲の「假裝人物」に描かれる葉子という女性の相貌である。

三人の子供の母として、人妻の役をも務めてきた葉子は、才分に恵まれた女特有の奔放な性格から、夫とも別れ、文學の道に新生面を求めて生きようとする女性である。

彼女は、初めて結婚した男と別れようと決意した時にも、三人の子の母であることなど一向に頓着なく、別の男が、直ぐにも面前へあらわれて來るだろうと云うような、軽い氣分で妻の衣裳を脱ぎ捨てた女なのである。

彼女は、男から男へと滑走的に走つた。或る時は畫家に、或る時は實業家に、醫者に、學生に、また或る時は、その大半を精神的にも肉體的にも傾け盡した皺の多い老大家に、風車の如く留處なく廻り走つた。老大家とは云うまでもなく秋聲の分身であろうが、それは兎に角として、處女作が出版されることになつた時、その装幀を引受けてくれた山路という畫家から、その作品に共鳴した手紙を受取ると、「立ちどころに吸附け」られてしまい、「これこそ自分が、かねがね捜していた相手だという氣がして、我慢性のない娘が好きな人形を見附けたように、それを手にしないと承知できなかつた。自分のような女性だつたら、十分彼を怡ませるに違いないという、自身的美貌への幻想が常に彼女の浮氣心を煽り立てて」いたのである。

然し、こんな風に情熱を掻立てた山路との結婚生活も、二ヶ月と経たぬうちに過去の事件の一つとして葬られ、出版を引受けてくれた男と何時の間にか関係が結ばれている。こうして一方での別の男と関係が続けながら、原稿を見て貰っている庸三の處へきては、「私、先生のところへ来て家事のお助けしたいと思うんですけど、何う」とばかりに相手を面喰わせるのである。

「先生の今迄の御家庭の型や何かは、そつくり其の儘少しも崩さずに、先生や子供さんのために一生懸命に働いてみたいんですよ。それで先生の生きておいでになる間、お側にお仕えして、お亡くなりになつたら、その時は子供さん達の御迷惑にならないように、潔く身を退きます」とも言うのである。「さあ、何しろ僕は家内が死んで間もないことだし、ゆくつり考えて見ましよう。そう軽率に決めるべきことでもないんですから」老大家は、そんな風に、その場を濁してはいいたが、結局、こうした切掛けから、二人は何時となく離れ難い関係に這入つてしまつた。

庸三の家へ出入りするようになってから、畫家や、出版屋との関係は薄らいだかに見えたが、その時には已に、同郷の若い實業家で、以前、歌を教わつたことのある秋本という男と交渉を持つていた。彼女にいわせると、「バトロンがなくなつては」と、云うのである。もちろん、秋本との関係は深いものではなかつた。ときたま上京した時に逢つてゐるという程度で、妻子や圍い者ま

であることを知つてゐる彼女は、生活費に相當するだけの好意を示せば事足りるのだと考えていた。だが、その秋本も、庸三との関係を知つてからは、だんだん遠ざかつていつた。すると今度は、庸三の家へ時々顔を出す若い學生と、急速度に接近し、果ては結婚したいと言ひ出した。庸三も、それをいいことに勧めて家を持たせるが、一と月とは續かなかつた。

こうした不規則な生活を繰返してゐるうちに、葉子は痔瘻に冒されて病院へ入つたが、結果から見ると、それは新しい男と交渉をもつ機會を作つたようなものだつた。彼女の手術に當つたK博士が、快方に向つた彼女と自動車に乗合せて出掛けるようになったのは、間もなくのことである。女流作家という外見が、男たちにも何か魅力となつていたのである。それをいいことにして、彼女も、男を側そばに置いて原稿紙に向うと云つた調子であつた。この奔放な女性を、作者は次のような言葉で説明してゐる。

「彼女はどんな無理なことをも平氣でやつてゆけるような、無邪氣と言へば無邪氣、甘いと言へば甘い、自己陶醉に似たロマンチックな感情の持主で、それからそれへと始終巧妙に自身の生活を送り替えてゆくのに抜け目のない敏感さで、神経が働いてゐるので、どうかすると何かしら絶えず陰謀を企たくらんでゐる、油断も隙もない悪い女のように見えたり、刹那々に燃え上る情熱はありながらも、生活的に女らしい操持に乏しいところから、動動もすると娼婦型の浮氣女のように

な感じを與えたりするのであつた」と。

初めて結婚した男と別れ、庸三を師として關係し始めた時から、彼女の鬱勃とした慾望や野心は、彼女をして運命的に狂わせるような結果に導いてきたことは事實だが、そうした経過を思慮もなく潜つていくうちに、いつか、それが彼女の習性のような固執となつて錆び固まつていつたのである。だから彼女は、珍しいもの好きの子供が、初め素晴らしい好奇心を惹いた玩具にも直きに飽きがきて、次々に新しいものへと手を延ばしてゆくのと同じに、碌にはつきりした見定めもつかずに、一旦いいとなると矢も楯もたまらず狙いをつけた異性へと飛附いて行くのであつた。そして、求めて行つた生活が、彼女の思い高ぶつた欲望に副わなことが苦痛になるか、またはもつと好きそうなものが身近に見附かるかすると、押え難い欲望の焰が更に彼女を驅り立てて、別の異性へと飛び去らせてゆくのである。

従つて、一つ／＼の現實について見れば、餘りにも神経質な彼女の氣持に迫り来るようなものが、この狭い地上の生活環境の何處にも見出されよう筈もないので、到る處で彼女の虹のような希望は裏切られて、我儘ゆえの嘆きと、哀しみが、美しい彼女の夢を微塵に碎いてしまふのである。しかし、北の海の荒い陰鬱な、美しい自然の靈を享けてきた彼女の、濃艶な肉體を流れているものは、いつも新しい情熱の血と生活への絶えざる憧れであつた。だから、とかく妥協し難い

ものように見える彼女の戀愛巡禮にも、神経的な打算があつたのである。作者は書いている。

「彼女の産れた北方には、詳しく言えばそれは何も北方に限つたことでもないが、女の貞操ほど容易く物質に換算されるものはなかつた。庸三は二度も行つて見た彼女の故郷の家の周り一體に、昔、榮えた船着場の名残りとしての、遊女町らしい情緒の今も漂つていいるのと思ひ合せ、近代女性の自覺と、文學などから教わつた新しい戀愛のトリックにも敏い彼女が、とかく盲目的な行動に走り勝ちである一方に、そこには何時も、貞操を物質以下に安く見積り勝ちな、殆んど無智といえ言えるほど曖昧な打算的感情が、恰かも過去の女性かと思われる程の廢類のなかに見出されるのを感じるのであつた」

もちろん、北方人として育ち、北方的な潮風に肌を鍛えられてきた彼女であつてみれば、その氣質や習慣のなかに北方的遺物が影を潜めていることは考えられるが、彼女の場合にあらわれている打算的な感情は、北方的というより、むしろ、經濟的よりどころの必要の方が、より多く切實に彼女を支配していたのではあるまいか。これは、新聞記事を取消して貰うために、新聞社を訪れたとき、主任の間に答える彼女の言葉のなかにも窺える。もちろん、その時は、その言葉が

直接おおよけになる性質上、いくぶん事實を粉飾して語つたとは思われるが、——戀愛も戀愛だが、生活や母性愛の悩みもあつて、今までの生活に行詰りがきたので、打開の途を求めようとしたが、何と言つても文學が生命だし、新しい結婚問題がどうなるにしても、矢張り先生（庸三）に頼つてゆく以外に途はない——という氣持は、初めの男から子供を二人まで引取つて育てている境遇から考えても、彼女に物質的援助が必要なのは明らかである。

と、言つて彼女は、文學以外の面で、庸三を煩わすことは自尊心が許さなかつた。従つて、子供を抱えた身の振方は、勢い第三者の援助に求めねばならなかつた譯である。ただ彼女の場合は、結果から言つて、どの場合も、どの場合も、それが豫め豫定されているかのように失敗に終つていたのである。もちろん、庸三も言つていのように、「夢の多すぎる女」には違ひなかつたが、必ずしも夢だけで動いていなかつたことは、庸三が自分の子供に素氣なくあたると言つて憤つた、あの母親としての心情のなかにも裏書きされている。しかし、こうした境遇にありながらも、それだけは棄てまいと縋りついてきた小説の途が、ついに閉される日がきた。葉子の消息が絶えたのは、その直後のことである。

かくて、「假裝人物」に描かれた葉子は、犠牲と負擔を拂つたにも拘らず、おのれの望む途にも進めず、痛ましい姿を街頭に投げ出さねばならなかつたのである。同じ名の有島武郎の「或る女」の

葉子も、經濟的な據りどころを求めて男から男へと移つた。同じ名であることが不思議な廻り合せだという意味ではないが、小説に描かれた同じ名の女たちが、時代と境遇を異にしながら、圖らずも同じ運命に墮いていつた姿に思い當るとき、女の生活の歴史に附纏う重い足枷あしがせが暗示ふかく思われるではないか。この小説の背景になつている時代は、「新興藝術派」や、プロレタリア文學が、ようやく擡頭し初めた時分のことであるから、昭和も初め、一二年頃だつたであろう。

そのような轉換期的な混亂に捲かれた女性の、思想的放浪というよりは、無思想になることによつて、しかも何ものか、おのれを満たすものを希求し、探し歩かねばならぬ姿が、彼女の流轉する愛情のなかに見出されるのではあるまいか。

すくなくとも、秋聲に描かれた葉子は、作者のいう北方的性格や因襲を越えた一般的時代性との繋がりつながりの深いものではないか。

彼女の文學に對する祈禱が、おそろしくロマンチックであることと、實生活的な心遣いの餘りの敏感さ、巧妙さとは、結局、彼女のなかに傳統の無慙な崩壊を支える何らの新しい支柱も芽生えぬことを暗示させている。つまりは、無思想と、支えなき心理の焦燥と不安から、功利的に卑俗の眼まなこは尖り、痴呆的な愛情は流轉かを累ね、そして、それとは反對の頭の奥に錯附いた文學への祈禱的な憧憬が、無暗と増長したのである。だから、彼女の犠牲的な生涯には、頽廢と空虚な思

想の戯れしか眺めることは出来ぬかも知れない。しかし一面に、彼女の悲惨な流轉は、轉換期の動搖における傳統の崩壊と、それに代るモラルの秩序が芽生えぬ間の、空虚と焦燥の歴史的實相を反映していると言えるだらう。このような時代、愛情さえ満足には育たず、主觀的には眞摯な要求が、常に好奇心と肉體的生理の氣紛れに支配されてゆく。意識的な向上への希いが、常に無意識のなかで敗北となつて結果する。そのような傳統の崩れゆく轉形期の渦中で、葉子という假裝人物の主人公の生涯は、進展する歴史の、停滯の一時期における輕佻な女性の陥りゆく必然の過程である。このような觀察のもとに、この主人公の姿を追求してゆくならば、今日の女性の或るものに取つて、決して馬耳東風ではおられぬ幾多の教訓的な針路が発見できるであらう。

附記 純情について——由來わが國の女性像には、舊時代のモラルに抗議したり、俗習への反抗に疲れて、實利的な妥協や諦めの思想に押流される例が多いと共に、新しいモラルを純粹な愛情や個人主義のなかに求めて、依怙地な肩を聳やかす女性のあらわれる小説も多い。

いわゆる純情は、尊く美わしい心根の表れとされている。しかし、いわゆる純情というものは、それが、はつきりした思想や意思の雜り氣のない追求の姿であればよいが、多くの場合、「純情」という美わしい形容に憧れの祈禱を籠めて、それを、空虚な方向なき感傷や、針路を

失つた故の無意味な足踏に終る例も多いのだ。

「假裝人物」の葉子は、文學に憑かれた女性の、幻想的な文學愛に破綻するのであるが、美川きよの「女流作家」という作品にあらわれる主人公、藤木葉子という女性も、幻想的に文學を祭壇に祀つて合掌する姿で描かれている。

彼女は、妻子ある流行小説家の愛人であるが、初め、その小説家を師として文學を勉強するうち戀愛に陥ち、夫を棄てて家出する。そして、小説家の愛の懷ろに巢籠るのであるが、次第に男の功利性や我儘や、自分たちの關係の不純なことに氣付き、文學への熱情を高めることによつて、色々な不満を掻き消そうとする。男の愛撫の嘘、經濟的な不純を知つて自律の心に目覺めゆく。彼女は先ず、大變な正義派となり、文學の純粹性に瞳を輝やかせる。それは、愛情の不純な關係や、説明の附かぬ金錢に眉をひそめることから始まり、それへの反動として、文學愛を高め、それに取縋ろうとする。いわば、彼女は、現實の不合理や矛盾に耐え切れず、と言つて、それを徹底的に證明したり、解決したりすることも出来ず、あらゆる憤りを、文學の神祕的な追求に填め、凡ゆる現實の惡から逃げ去ろうとしている。

要するに、彼女は現實の汚穢しさを遁れて住みよい幻想の正義や純情の筈に閉じ籠ろうとするのだ。

せつかく舊いモラルを否定し、男の我儘な功利性と愛情の嘘を發きながら、それをモラルの現實的な闘いの地面から跳躍させてしまうのだ。反對に、追求めた文學も、その正しい價値を見究めもせず、現實の苦痛を癒すための方便となつて、無暗と高ぶる感傷を純粹な尊さの祈りだと思ふようになる。いわば、文學は彼女にとつて現實の苦痛を和げる麻醉藥となる。

このような例は、堀辰雄の「菜穂子」にも共通する。菜穂子という女性も、結婚における愛情が不合理なこと、欺瞞の多いことに耐え切れず、色々と打開の方法を自論むが、それは極めて衝動的であり、心理的であり、自意識上の満足にとどまつてしまふ。現實に思い悩みつゝ、何か分らぬ純粹なものに郷愁を誘われてゆく。彼女の崇めたり、信賴したり、祈つたりする純粹な自我の掟は、結局、實生活的には應用されないばかりか、その矛盾やジレンマを解決しようとする氣慨や抱負にも弱く頽廢的である。

このような譯の分らぬ感傷的な「純粹への憧れ」は、要するに實生活に對する無氣力からくるのだ。この無氣力は、「寢園」の奈奈江の地盤と同じ有閑的な心理のうちに宿つたものだ。彼女たちを代表とする女性は、習俗や社會的な欺瞞の心理的な矛盾には、わりあい敏感に氣附くが、氣附いたとしても、それを積極的に打開する現實的方法には手を拱く。そうして、悲劇的表情で、意識的な停滞の足踏や、反芻を何時までも續けるといふ實生活の没落者であることが

特質である。

このような特質は、日本的性格の悪い一面からと、近代的なデカダンの一面から形作られた。生活からの逃避を純粹な美しさとする習慣も、生活と人生の放棄であり、侮蔑である。純粹とは何處までも、思想の現實的な打開、新しいモラル建設への歩みのなかに本來の美しさが宿ることである。そして、前掲のような「純情」というものが、どれだけ傳統的に、女性の暗い現實の麻醉となつて、ながく、打開する心を遮つたか分らぬのである。

5。

天真な心と生活をもつた萬葉時代の女性たちを考へるとき、それが歴史の發展によつて變らざるを得なかつたとはいへ、今日の多くの小説や物語りに著し傳えられている女の生活する姿は、自然性を歪められている點において、また心理と肉體の均衡を失つていくといふ點において、萬葉時代に通過した女の生活の歴史を、新形態において蘇生することが、いかに困難になつてきているかは想像に難くない。それは、「寢園」の奈奈江のような心理の分裂や、「假裝人物」の葉子の流浪の愛情ともなつた。近代生活の慌しさ、波動の浪たかい環境に揺られた果に、心理と行動

の統一を奪われ、人間的な自然を剥ぎ取られゆく女性たちの姿。これは、あながち女性に限らず、男性一般をも襲つた過渡期の心理不安の表象でもあつた。だが、女性の近代悲劇は、更に深刻な獨自性を有つていた。

この事は、女の一人々々が、異なつた生活條件に生きていながらも、全體的には男より不利な立場に居ること、そして、その不利な立場が女性に自覺されているにも拘らず、生活内容は、依然として舊い仕來りを踏襲している點などが、女の日常生活を益々社會の片隅へ追いやるような結果ともなつたのだと思われる。

例えば、最も近代的だと云われる精密機械の組立に従事する女性が、その機械の性能を理解しようとするほど熱心に、果して、自分の生活や人生を見詰めていると言えるだろうか。また、自分の生活や人生の繋がつている社會生活や、時代の動向が現實的には女の生活をどのように支配しているかと云うような事柄を、自分の携わつている仕事と結んで注意ぶかく考えていると言えらるであらうか。なるほど、一部の女性は考えているかも知れない。しかし、それが極く少數の人間に限られていることは、争えない事實であらう。

もちろん制度や習慣というようなものが、女性の内面的な努力だけで變り得るものではない。が、少くとも、自分を取巻く生活の環境と條件を正しく認識することによつて、自分自身の生活

内容を裕かに充足させ、外部との摩擦の過程において、自己の人生内容を發展させるべく努力することは不必要ではなからうかと思われる。殊に、女には分娩という肉體上の自然的素質があつて、人生内容にも男と異なつた側面が加わつて居る。愛情の問題や結婚についても、また幸福な場合も不幸な場合も、彼女たちは、この自然的素質を通してのみ人生や生活を形成しなければならぬ。これは、個人的にも女の生活内容の重さとして、女性の人生を特殊なものにしている。だから、愛情の對象として男を選んだ場合も、生活經濟の問題が深く絡まつてくるのであり、人生的にも多くの負擔が課せられる譯である。そして若し破綻した場合は、男が精神的な傷痕で畢つても、女はそれ以上に、肉體的にも亡びなければならぬのである。従つて、簡単な理由で男と交わると云うことも、女性にあつては、深い人生問題として考えられるのも當然であらう。

石坂洋次郎の「若い人」に描かれる江波恵子という少女の性格は、この點で興味ある存在と言えるだろう。また恵子の母親も、異質的な愛情の持主として、橋本スミ子と奇異な對象を示している。

「若い人」は、ミッションスクールを背景に、若い先生である間崎と、彼と同期に赴任した女子大出の女教員橋本スミ子が、江波恵子という學生を中に挟んで、若い感情と生活とを露骨な角度

から躍動的に照射させた小説である。

男友達の多い母親から、父親というものを知らずに育てられた江波恵子は、母がそうであつたように、感覚と理性を、「白濁した血の流れのなかに喪失」し易い性格の女として、人生に對しても、特定の立場や信條を持つこともなく、恒に異常な心理と極端な行動によつて早熟に自己を表現する少女であつた。

ちようど間崎が五年生の作文を受持つたとき、同一の課題で書かれた「雨の降る日」の文章のなかに、マス目を無視した達筆な走り書きで、自己と、自己に繋がる血縁の運命を、烈しい呼吸で語つている少女の心の記録のあるのを發見して、俄にその書き主に興味を寄せるようになる。少女とは、言うまでもなく江波恵子であつた。

間崎が江波恵子の名を知つたのは、赴任後まもなくであつた。職員室の話題にのぼる江波は、ひどい我儘者で、よく學用品を忘れる、贅澤な所持品を持つてくる、寄宿生であるにも拘らず遅刻早引が多い、教師に理窟を言う、そのくせ頭は素晴しい、といつた風な、教師の側からは最も扱いにくい生徒とされている、大柄で美貌な少女であつた。彼が江波の性格に興味を有つようになつたのは、作文を見てからのことであつたが、江波は、その時すでに若い教師である間崎に、他の女生徒とは違つた注視を、心の片隅に感じていたのである。しかし、思つたこと、感じ

たこと、また考えたことを率直に、自分の心情として表現できないこの少女は、間崎に對してもつねに嘘ともな當ともつかない危険な所作を振舞つていた。彼女は、事實を認める前に、事實以外の事實を信じようとする性格に傾いていた。自分の心に訴える欲求を、素直に自分のものとして受け容れることの出来ない女だつたのだ。だから、僅かでも自分というものを縛りつけるような事態に直面すると、驚くべき速さで身を交してしまふのである。少女らしい機轉と言へば、言えるのであるが、反面から考えれば、意識的な圖太さとも思えるほど、理解し難い態度を時と處に應じて示した。この捉え難い江波の「無邪氣とも太々しいとも」つかない表情に對して、作者は、「そのどちらかに決めようとするれば、却つてそれが嘘になる紙一重の危険なスタイルを易々と自分のものにしてゐる不思議な少女」だと言つて、次のように性格を指摘している。即ち、「どんな大人の言葉を語つても、しつくり身についてゐる代り、自分の立場というものを恐ろしい程に持たない、従つて彼女の語る言葉、思想は、惡靈のように黒い翼をはためかせて、大氣の中を浮遊して死滅する」と。

このように作者によつて語られている江波は、言動と行爲が心理的にも丸で統一されてゐないという點で、或る時には性格を捉えることさえ困難に思われるほど、矛盾に充ちた態度を示す少女なのであつた。

間崎が彼女に興味を持ち初めたのも、確かに、この桁外れな生活態度にあつたことは事實だが、しかし、それは時間の経過に随つて別の感情に置換えられてきた。だが彼は、江波との間に個人的な交渉が生じてからと云うもの、「疲れた時、寂しい時、江波の姿が雲のように心を陰らすのに氣附いて顔を赤くすることが屢々あつた」が、それを男と女の間を生じた戀愛感情として、素直に受取ろうとはしなかつた。教師であるという頑な限界が、江波を、いつも子供っぽい學生以上に評價できなかつたからである。従つて、「君が女學生だなんて可笑しな事に思われる」などと、伸掛のしかかるような感情で江波の耳許に囁いていながらも、一方では彼女に對する心情を、「戀愛だとは思わない。繪でも文學でも人間でも、類廢的なものに心を惹かれる自分の傾向を、平素から極力警戒する意味で、江波に對する關心も、他の生徒に見られない成熟した一つの性格に對する興味に過ぎない」という風に、心の大半に喰い込んでゐる感情に對しても、彼は、極めて傍觀者的な態度しか執れなかつたのである。

これは、率直に自己の心情を表現できない江波の偏つた人間態度に共通する一面でもあろう。彼の教師という立場に對する必要以上の固執は、反面から言えば、偽れる遁辭の合理化かも知れなかつた。即ち彼の、強いて教師だと考へるところに、戀愛感情を能動的に生活化することの出來ない脆さが潜んでいた譯でもあつた。この間崎の江波に對する心的態度は、同僚の女教員であ

る橋本先生に對する感情の交渉の中にも、明瞭な姿で現れている。

たとえば彼の橋本先生に對する興味は、理性的に行動する自分の意志に一致する女として生じた感情であるにも拘らず、その感情を單に、興味の對象として遠くから楽しんでゐる點などがそのうちである。感情的に生活する江波と、理性的に生活する橋本とが、二つの性格として彼の興味の對象になつてゐるに過ぎないのであつた。感情と肉體とが、女らしい習性で働いてゐる。その働きを、彼の場合は、戀愛感情とは別のものとして楽しんでゐると云うことが、彼の女性に對する接近の特徴的な心理でもあつた譯だ。だから彼は、江波と橋本を、女性として好んではいても、そのどちらにも積極的に自分の感情を賭けようとはしなかつたのである。つまり、成行に任せると云つた消極的な生活態度が、彼の行動や意志をいつも不徹底なものにしてゐたのだ。この間の消息を伝えるものに、江波との次のような會話がある。

——先生、私は私のことを心配してくれる人があると、その心配は私のためのものでなく、その人自身の娛しみのためではないのかしらと疑ぐる辭があつて不可いけない。例えば、或る人とつては道徳的な娛しみであり、他の人にとつては別な目的を満たす娛しみではないかしらと思ふの。そして私は、自分をそんな餌食にされたくないと思ふんです——

——そりや僕の場合も、自分の娛しみのために君に關心を抱いているという事は確かだ。然し、その娛しみの性質によつては強ち非難さるべきものではなく、寧ろ賞讃されていいものではないかと思う。僕の場合がそうだと云うんじゃない。一般論としてだね。

——どんな場合がそう？

——君の考え方でいえば、娛しむだけのものを自分も失つている場合がそうだ……然しそれよりも、娛しむといふことを許したり許されたりする所に、はじめて人間の生活が成り立つんじゃないかと思う。個人だけでは生活がない。第一、君がこの世に生れ出でたのも、君自身の意志に依るものではないし、君が他人に對してどんな態度に出ようと、行摺りの人々が、あゝこの子は美しいとか、一寸鼻が高いとか、その他いろんな感じを受けるのを君自身はどんなにしても防ぐことが出来ない譯だからね。

——フフ……では、先生は自分が娛しむだけのものを自分の方からも支拂うという愛し方がお出来になりますか。

——出来ませんね、僕は。僕には盗み喰ひして自分を太らすという愛し方しか出来ない。

ここでも窺えるように、間崎の知識人らしいこの狡さは、二つの意志の結合のなかに生れる結

果よりも、むしろ、結果のない過程だけを享樂しようとしているのである。

この點で橋本スミ子は、彼とは反對に、最初に目的なり意圖なりを設定して、そのなかに實踐を當嵌めてゆこうとする性格の女であつた。戀愛というような特殊な對人關係に對しても、「人と人とが結び附くのに、弱い暗い面からしてはならない。明るい強い面から入らなければならぬ」といつた具合に、一片の感情をも論理の背景なしには考え得ない性質なのである。たとえば間崎が、角ヲ矯メテ牛ヲ殺スという風の格言で、彼女を評したとする。と、彼女は即座に、格言と實生活の間に横たわつている不合理な關係や摩擦を楯に反撥するし、感情的にも好めない口吻で言うのである。

——でも私は、一體に、古い格言など好みませんの。その場限りに都合のいいことを云つていだけで、一貫して我々の生活に責任を持つてくれないと思ひますから……私は科學的なものでなければ信頼する氣になれませんわ。一ダース位の重寶な格言を準備しておいて、それを世渡りのポイントの上に使い別けて、したり顔に暮している世間のエライ人達を觀ていると、氣が重くなりますわ。あんな殆蓋かきこたのような思想が、社會の表面を被うている限り、我々の人生は何時まで經つても明るくも正しくもならないのです——、あなたは、そうお感じになりませ

んか。

かように彼女は、到達された観點からのみ人生や生活を測定しようと考えていたのだ。だから、成行に任せて生活を設計している間崎とは、その生活態度において全く立場を別にしていた。しかし人生態度が極端に異なっているという意味では、橋本より寧ろ、江波の方が間崎と鋭く對立している。橋本と間崎は、物の觀察の仕方とか認識の仕方に食違ひはあつたけれども、人間感情の上では、粗野な行動に直接する江波より遙かに共通點があつた譯である。だがそれにも拘らず、間崎は、江波により深く興味を持つていたし、また感情的にも江波の方が彼の心情をより多く捉えていた。

これは橋本が教養が高く、江波が低いという單純な理由からではない。男の共通的な情緒として、肉體に即した嗜好を、思想より低いものだとして輕蔑する形式的な橋本の人間態度が、男性としての間崎の何處かで強く反撥していたからに違いない。

間崎にしても、認識の優れている點で、思考判斷の冷徹な點で、女としての橋本を尊敬していたし、また執着さえ持つていたのであるが、女の肉體を切離して教養なり才能というものを評價するとなると、彼女の能力がどれだけ彼を驚かすことが出来たであらう。つまり彼女が一個の女

性であり、そして肉體と感情とが、女特有の習性から出ているという點で、彼女の能力は一そう又の軋む果實の如き密度を有つていたのでし、またそうであつたればこそ、男から特別の關心も寄せられた譯である。だから肉體に即した嗜好を彼女が否定する限り、男の心情は當然かの女を離れてもゆくし、感情的にも親しめなくなる筈である。

江波に特に興味を持つた間崎の場合も、個人的な好悪感とは別として、男一般の共通心理を間崎らしい形で表現した迄のことであらう。江波は、彼の下宿へも悪びれず行つたし、彼もまた、江波の家に厄介になつた。その間の感情の経過にしても、お互に戀愛關係の自覺に立つて接していた譯ではなかつたが、お互の若さのなかにある性格を離れた感情の欲求が、お互の感情を闘い取るうとする點で、二人の生活を樂しませていたのかも知れなかつた。享樂的でもあつた。享樂の對象にされたくないという江波と、享樂するために關心を持つていたという間崎が、互の立場と性格の垣を自覺しながら感情の遊戯を續けていたのである。借に没頭できなかつたという點で、それは確かに近代的心理の遊戯であつた。従つて間崎が、最後になつて眞剣に江波と結婚しようと考えたとき、この少女の口から以外な宣告が下されるのである。

——先生の卑怯者！ わたくし先生に言つたじやありませんか。「わたくし先生にお願いしませぬ。先生が私について考へて下さることが、いつも私を立派にし私を美しくしてくれることであ

りますようにつて……、目先の幼りや子供扱いの方便を排して、それが現實にはどんな苦しい負擔を負わせる結果になつても構いませんから、いつも私を眞人間に鍛え上げてくれる嚴しい本當の愛に満ちた考えが先生の胸の中に宿つておりますようにつて……」それから先生は私をどんな人間にしてくれたでしょう？ 授業時間中に狐憑きのように手を挙げたり、國語讀本の表紙の意味を訊ねたり、休時間毎に臆面もなく職員室に入り込んだり……、一生懸命になろうとすればするほど、そんな馬鹿げた行いしか出来ない人間にしてくれたのです。そんなにも惨めな人間に——、それが先生の愛だつたのでしようか。先生は私を一番スポイルする方法で私に觸れたのです。先生は弱いんです。狡いんです。卑怯なんです。——間崎先生、私はこんな惨めなことを言わずにお別れしたかつたんです。でも先生が餘りしつこく附纏うものだから……。私、でも先生を恨んだりなんかしてませんわ。第一私、先生のことなんか直ぐ忘れてしまふと思うの。男という概念だけを弱く疲れた肺活量でゼイ／＼と呼吸しているだけで、個々の人間に對しては一切無分別なの、ママのそういう生活を私も間もなく受繼ぐことになるんだわ——。間崎先生さよなら。私これからとても楽しい生活に入るみたいなのがしてるの。

かくて間崎は、結論なしでは愛情さえ肯定できない性格の橋本と、默契らしい默契もなく新しい關係へ這入つてゆくのである。

「若い人」に描かれた、この兩人の女性の性格は、相互に異なつていふという意味では、全く兩極に立つた性格とも言えるのであるが、しかし感情の傾斜のなかに、肉體も魂も平氣で投げ込んでゆける危険な生活態度の江波が決斷の乏しい男性を振離してゆくのに反し、思慮と分別を辨えた理性的な橋本が、こうした男性の結末に終止符を打つという現象は、歴史的に植附けられた傳統と、新しく咲き出ようとする女性の理智との混亂した姿を反映したものではなからうか。探り難いように見える、このような矛盾した心理と行動の分離は、「寢園」の奈奈江にもあつた。こゝに、近代人間の悲劇が横たわつていたのである。

早熟で生理的な芽生えに放浪するような恵子の頽廢のなかに、目敏い功利心と、おのれの生命を庇う慧智の發芽があつたのであり、知性の形式主義に捉われた橋本先生にも、それを覆すような生理的な人間の命が、脈たかく燃えていたのである。初めから環境的に破綻しかけている異常な恵子の性格は、間崎とともに心理の二重性に戯れている。こゝに近代感情が素朴さを失い、意思の決定に見離されながら生きる、放浪の姿がある。そして、橋本先生には、思想を實生活に滲透させ得ない、頭でつかちな近代女性像が眺められる。ともに何らかの二重の分裂に、自らの生命を横たえていることに變りはない。ともに、近代の變化と流動の激しかつた社會生活の環境が生んだ畸形の性格であり、人間本來の潑刺たる意思と、統一された感動の悦びとに見離されて

いる。いわば、人間の自然性の歪める姿であり、その歪みの悲劇を、表面的には、いかにも遊戯的に振舞っているかの如き印象を興えるところに、彼女たちの二重の過失があつた譯である。しかし、前にも述べた如く、彼女たちをも否定的にのみ考へてはならない。發展する歴史の形を變える混亂のなかに挟まれて、その心理の二重性や、肉體と心理の食違ひを必死に闘わせつゝあつたのだから。たとい、彼女たち自身が破綻したとしても、この二重性や素朴さの喪失は、歴史の發展とともに次第に、正しい統一と、自然な意思の形成を果し卒えるように導かれてゆくに違ひない。そして、彼女たちの意識せぬ悲劇は、發展の過渡期の、その後の正しい人間的な歩みを出發させる渦卷のなかで避けられぬものであつた。それは未だ、影うすくなつたとしても今日も生きており、今日も多くの反省を興えずにはいない近代心理の搖籃の相である。

Ⅱ 歴史の發展と女性の愛情

1。

「お前は他家の娘みたいに働ける譯じゃなし、病人は病人らしく食う物さえあればオンの字だ」と、母の言葉に押附けられて、流行の着物も下駄も、働く人のみか買うものだと言ひ、油著けのない束髪と繼の當つた着物で二年間を送つてきたみさは、ようやく自分の身窄しさを知る年頃になつていた。彼女は十九であつた。「穀つぶし」と、肩上げのとれたばかりの弟からよく毒突かれ、病弱の少女であつた彼女は、關節ロイマチスがもとで工場も罷め、天秤棒一本を種に働く父と、自動車工場へ幼年工として働に出ていた弟と、母の四人暮らしの家庭のなかで、二年という年月を病床に送つていたのだが、自分一人のために内輪の揉めることを苦にして、金釘流の筆蹟で、履歷書も何枚か書いて送つた。しかし、どの會社や工場でも、一度は出て來いというのだが、體格検査が濟んでしまうと振向いてもくれなかつた。空しい努力と苦しみが續いた。或るとき、體の調子を見て、何度か叩いた職業紹介所の門を潜つて訊いてみるのだが、所員か

ら示される會社や工場は、どれもこれもが撥ねられたところの名前はかりである。「いや、有る事は有るがね。煉瓦を造る會社なんだ。そりや酷い労働でね、女工というより女土方だよ。」最後に所員は、豫算に入れてない口吻でその名前を持出したのだが、彼女は必死になつてそれを聴取り「どんなに辛くても辛抱します。どうぞ、お世話して下さい」と、相手の苦笑するのも構わずに訴えるのである。

窯業會社の女工として働くようになった彼女は、糊の硬い浴衣に兵古帯を締め、辨當箱を抱えて女工たちの群に雜つて通い始めた。二年ぶりに聞く家の者の笑い聲も、彼女には晴々しく響いた。朝ごと仰ぐ空も闊々とした感じで眼に映つたし、足どりも軽かつた。働くこと、そのことが、病後の彼女には、金錢とは別に楽しく感じられたのであろう。だがその楽しさは、長くは續かなかつた。「女土方だ」と言つた所員の言葉が、過激な労働を支えている兩腕に緊々と伸掛つて思ひ出された。月給袋を貰う日が來た。病後の全身が痺れたように干だるかつたけれども、——これ みんなと同じ着物と、光つたハンドバックを買つて——と思うと、救われたように、彼女は胸を躍らせるのである。だが母に渡すと、早速佛壇に上げられ、空想だけが慘たらしく何時までも残つた。それでも父は、骨折リ賃だといつて、珍しく白木の日和下駄を買つてくれたのである。

女工部屋の片隅にいる時でも、「カラ／＼と野暮くさく鳴る」自分の日和下駄の音が、耳底を離

れなかつた。同じ門を潜つてくる同僚たちの、美しく着飾つた姿を見るたび、「女土方のくせに」と腹立たしく思うのだが、やはり、「一度でもいい。あたかも髪をロールにして、流線型の下駄を履いて——」と、羨ましく心で思うのである。だが二度目の給料日がきても、自分の身の廻りのものは、何一つ殖えはしなかつた。彼女は、悲しく思わないことはなかつたが、それらしい不満を口にしようとも思わなかつた。

「友達のしまが、時々、暗い顔をして溜息を吐くみさに「どうしたのさ。心配事でもあるの？」と訊くと、みさは、しまに縋り附いて泣いてしまいたかつた」と、作者は書いて、次のように言つている。それは「第一に病氣も誰にも知らさず斯うして働いていること。第二に親が人並の服装を着せてくれないこと」それを彼女に話したかつたのであるが「第一は早く言えば身勝手のようなものだし、第二は裏町生活に馴れた兩親は、總べて裏町らしい生活に満足している。それを裏切つて娘が、「表通り式」の眞似をすれば、妙な反感から「いけすかない」で片附けるのも無理のないことだし、結局、私は悲しいと他人に訴えても、どんな理由で悲しいのか説明の出來ないみさは、「うゝん、何でもなし」そう言つては頭を振るのだつた」と、みさの苦しい立場を作者は描いているが、異性を知るようになってから、それは一層の切實さで、彼女に迫るのである。

職場で知り合つた若者のところへ遊びに行つた時にも、着飾つたしまが普段着の自分と並んで

坐つていたことを、みさは何時まで痛ましい記憶として胸に曇み込むのであつた。それは、その若者としが、職務怠慢という、あやふやな理由で減首された後のことではあつたが、彼女にはそれさへ美ましく嫉妬された。だが三月目へかかつた頃から、再び最悪の状態がみさの肉體を蝕んできた。缺勤が續くようになつた。呪わしい病魔が、だんだんと體の自由を奪い始めた。寮業會社を罷めようと決心した彼女は、その體の堪えられそうな仕事を捜し、是が非でも「穀つぶし」にだけはなるまいと覺悟を新しくするのである。

これは「煉瓦女工」の梗概だが、恵まれない境遇に働く女性の物悲しい心情が、そこでは惻々と讀者の胸に實感を訴える。

異性を胸に描いて頬を火照らせる年頃のみさにとつて、「髪をロールにして、流線型の下駄を履いて」という希いは、すこしも誇張のない少女の欲望でもあろう。また、職務怠慢という、あやふやな理由で減首されたにしろ、男と女とが親しく接近してゆく姿を、美ましそくに嫉妬する姿も、男から聲をかけられる機會の無かつたみさには、一層みじめに、おのれ自身の境遇に照らされて思い出されたに違いない。

ただ働くこと、そしてそれが、自分の希望として何一つ酬いられないで食住に變つてゆくこと、悦びとしてではなく、家計を支える重い責任としての勤勞が年若い少女の兩腕に食込んでくるこ

と、これが二年のあいだ病床にいたみさの、蘇生した時に直面する現實だつたのである。今日おおくの女性たちが職場に出てゆく姿には、曾てのような、お白粉かせぎや嫁ぐ日の準備を調えるための餘裕は見出し難く、彼女らの多くには、一家の生計を支える共同負擔者としての切迫した責任の重さが感じられる。

みさも、天秤棒一本を頼りに働く父と幼年工としての弟を持つてはいるが、それによつて彼女が、病床にも安閑としていられない切迫した生活の氣流が、偽りのない現實として、この少女の上に重苦しく伸掛つてきているのを知らされる。

「悲しいと他人に訴えても、どんな理由で悲しいのか説明の出来ない」少女たちの心情は、その儘、家計を背負つている娘の一人々々に通ずる不幸でもあるが、ここには、女の獨立と勞働に對する悦びは、むしろ歪められた形で女の生活を約束している。とは云うものの、こゝには女性の勤勞への参加によつて、働く者のみが授かる觀察力や、批判力の鋭さと、的確さが表れている。それは、一面に現代女性の感傷の喪失とか、抒情の荒廢とか言われる傍らに、請賣りの教訓や空想に頼らぬ、素朴で眞剣な理性の芽生えと現實の動きに對する確かな批判力の盛上りとが暗示されると同様である。

女性の國家生産力への参加と努力が、同時に女性の前進を促す契機となり、明るい未來の健康

な形成に、今日の女性の急速な自覚が齎されつゝあることは争われぬ事實であらう。

職場に働く女性たちが、家族や家庭を離れたところから独立した生活と自覚を掴んでゆくといふ常識にとつて、彼女たちと境遇を一つにする女性たちの出發は、家庭を支える力としての生活から立向かねばならないのである。新しい日と新しい自覚は、巷に合言葉となつて溢れている。しかし、巷の風のなかに立つたこれら少女たちの心情や希いの現實というものは、果して男からの言葉をそのまま受け容れるほど順調な経路に置かれていると言えるだろうか。

「もつと物價高につれて昇給させて下さい。親を見なければならぬ責任上、生活に困つています。昇給することばかり祈つています」

「夜勤をしても収入を殖やしたいと思ひます」

「十年働いていても、新しい人と大して變らぬようでは餘りに情けない」

「入社して二三年の者と六七年度の者とが餘り差別がなく安いので、年功がたてば、經つたようにならぬ上げて戴きたさ」

「日給が安い上に貯蓄というものが引かれ、取るところが少く生活に困つていますから、もう少し何とかして下さい」

これは工場監督官の報文に載つていたと言つて、岩上順一氏が引用していた少女達の聲であるが、このか細い叫びのなかにある生活や受難は、みさや、しまたちと軒を並べる家庭の娘に限られるのではなく、タイプを打つたり、ペンを走らせたり、算盤を弾いたりしている年若い女性たちが、それぞれに擔つている生活の聲でもあらう。そして、それを漕ぎ抜ける困難のなかに、今日の女性の國家生産力への参加も、現實への目覺めも、より激しく回轉しつゝあるのである。つまり、歴史發展のエネルギーとしての女性の努力は、より大きく振幅を廣げつゝ、その責務は、より重く伸掛つてきたのである。

このような働く女性たちの姿が、重要な役割を持つて我が國小説史上に登場してきたのは、何時の頃からであつただらう。私はそれを知らない。知らないけれども、しかし、その逞しい姿において、長塚節の「土」のおつき、伊藤左千夫の「隣の娘」のおとよ等の、明治期の農民文學にあらわれた女性の強い意欲を忘れることは出来ない。

農民を描き、農村を語る物語りの中には、常に男と共に働き、男に勝る女性の姿が、何の無理もなく描かれ、そしてそれは讀者の側からも、素直に受け容れられてきたのである。「隣の娘」の一節に次のような場面がある。

——おとよさんは絶対に、自分の夫と並ぶを嫌つて省作と並ぶ。何事にも穩かな省作は、こう並んで刈り始めると負けるは残念な氣になつて、一所懸命に顔を火の様にして刈つている。おとよさんは百姓の仕事は何でも上手で強い。にこ／＼しながら手も汚さず汗も出さず、しやく／＼ととして刈つているが、四把と五把との割合をもつてするより多く刈る。省作は齒ぎしり嚙んで競うてみても、おとよさんにかけては殆ど子供だ。おとよさんは微笑で意を通じ、省作の스가ヒを十本、二十本ずつ刈りすけている。省作もおとよさんの親切には動かされて、眞底から好い人だと思つた。おとよさんが人妻でなかつたら、その親切を戀の意味に受けたであらうが、生娘にも戀したことのない省作は、未だおとよさんの微妙な素振りに氣づくほど經驗はない——。

劇しい仕事にもめげず、美しい心情を持つたおとよさんのような、生活意欲と純眞な心の女性の姿は、現代農民文學のなかにも指摘することは困難ではない。

たとえば伊藤永之介の「梟」「鳥」にあらわれる女主人公たちや、和田傳の「沃土」に描かれるお銀などがそうである。

女性が男性に勝つた働きを示すのは、少くとも農村にあつては、稀めづしい物語りではなかつた。

それは、家庭に居残つて慎ましく家事と子供の世話をしている女というものが、百姓の生活の歴史には算えられていなかつたからである。しかし、都會を描いた小説の中に、女性が男性以上の働きと逞しい思考とをもつて登場してきた歴史は、未だ新しい記憶の出來事である。と云うよりも、ようやく最近に到つて作家達は、そのような女性像の完成に向つて競い立つてゐるかに見えるのであるが、しかし、そこには因襲の名残や缺點に悩みつゝある女性の暗い消極面と、打克とうとする新しい積極面との生きた統一の姿として女性は捉えられてゐるとは言い難い。とは言え、おのれ自身のために生きようとした女性の姿を通じて、現代女性の心理や生活意識や性格や思考の把握を志した小説を見ないという譯ではない。

たとえば丹羽文雄の「鬪魚」にしても、「東京の女性」にしても、神山潤の「春扇」にしても、間宮茂輔の「柘榴の花」にしても、眞船豊の「緑窓日記」にしても、挙げれば幾つとなくあるであらう。そして後で述べる石川達三の「母系家族」も、その一つとして加えられる作品に違いない。

附記 奮闘史的な女性と抒情の喪失——古來、女性の男を凌ぐ活動に世間の眼を見張らせ、歴史

の改造に與かつた例は多い。しかし、わが國の小説にあらわれた例は、いや、外國にも、それは稀なものはあるまいか。その意味で、第十四回芥川賞を受けた芝木好子の「青果の市」にあらわれる主人公八重子は、推薦委員が口を揃えて健氣な庶民的女性の奮闘史物語だと言つたほど、女性の男を凌ぐ生活力の根強さと、働く者のみに宿る健氣な勵み心の漲りが描かれている。

主人公の女性八重子は、一ど没落した青果問屋を再興しようとして、氣の荒い若衆に客を奪われまいと氣が狂つたように相手の胸に手をかけて咬呵をきつたり、騒々しい賣場で油斷なく有利に競落す。はたから「少々キ印だよ」と笑われるほど働いた。しかし、統制經濟は、唇を噛み緊めて結婚を諦め、女らしさを振棄てて健氣に再興を計つた仲買人の位置を、容赦なく洗い流して行く。周圍の者が、統制の轉回から、職場を變えるか、大陸へ雄飛しようとする騒々なかで、彼女は、ともかく、「これからどうなるだろう」という不安に誘われながらも、叩かれても叩かれても起き上ろうとする、勝氣な氣性と粘りを胸に喚び起して、緊張するという筋である。

この粗筋から、窺えるように、彼女は、いわゆる奮闘史美談の主であり、家業の擔い手として、或いは、生産の場面でも女性が、その全能力を揮うためには、「女らしさ」は自然に喪われてゆくこと、いかに「女らしさ」とは、男だけを満足させる裝飾であつたかを知らせる。

今日の職業に進出した女性が、そして、すべての今日の活動する女性たちにとつて、女らし

き感傷や香り高き優雅な姿態は、却つて活動の妨げであることを暗示する。男並に働き、或いは奮闘的な生活の開拓に進む女性が、今は多いのであるが、彼女たちが、いかに過去からの引摺りの眼で歎かれ、嗤われようとも、彼女たちは未來へと延びる新しい女性の先驅であり、新しい女性倫理の革新の擔い手であることは間違いないのである。

このような、働く女性の女らしさの失われゆく姿を、よく「抒情の喪失」などと非難し、遡つた王朝時代の女性の感傷の美わしさや、過去女性の優雅な精神を懐しむのであるが、こゝにちの社會狀勢に於ては、女性を徒らに過去の青董派の抒情に戯れさせて置く餘裕はないのである。と云うより、そういう過去の抒情の喪失に代つて、理智と感情の明るく、逞しい昂揚が、新しい抒情と活動的な美を創造せしめてゆくのである。生活の實踐から離れ、男の袖に縋るための弱き心の表現としての、抒情や涙脆さは過去のものである。

しかし、一面には、この抒情や感傷の喪失が、女性を日和見主義や功利的に導いて、何ら人間のゆたかさをも感じさせないという非難も、一應は事實である。もちろん、これは女性に限つたことではなく、青年も亦その愛いに沈みつゝある。だが、それは何處までも進歩の側面の泥沼である。

この泥沼から追い出すことは、もちろん必要であるが、この惡質な退化の面のみを眺めて、

新しい女性の堅實な知性と感情の戯れなき健氣さに、新しい世代の生長しつゝある半面を見落してはならぬ。この新性格の歴史的な變化を全體的に眺めぬと、往々否定に捉われ、女性の生産力増強への参加をも否定する矛盾に陥るのである。

2。

「母系家族」に描かれる幾人かの女性のうち、最上葵と鮫島まさ代とは、その性格や行動の點で、特に見逃せない側面をもつた女性であるが、葵の姉として登場する恒美も、全く別な立場に立つている女として、興味ある對象を示している。

「母系家族」は、高村晞三という若い獨身の辯護士の經營する薫風寮を中心に、そこに住む子を抱えた女たちの生活の生態を描いているのだが、葵も亦、彼の秘書として働く女性である。

彼女は何事でも手際よく捌ける娘であつた。薫風寮の仕事一切を引受けて、午前中は事務、午後は學校から歸つて來た子供たちの相手、夕方母親たちが勤めから歸つて來ると、子供を順次に引渡し、また事務の仕事をした。タイプも打つし、算盤も弾くし、幼児のミルクの濃度から寮内の設備衛生、兒童の晝食の献立まで指圖し、その間には高村晞三の秘書も勤めるといふ、多藝で

あり多才の娘であつた。彼女は、忙しいことには馴れていた。雑務を片端から處理してゆくのが愉快であつた。どうかすると、歌をうたいながら、それも聲樂家のように聲を張りあげて歌いながら、時には口笛さえも吹き吹き仕事をしていた。

しかし、仕事は決して楽しいこと許りではなかつた。或るときは置き去りにされた子供の面倒を、あるときは歸りの遅い母親に代つて添寢を、また或るときは、病氣になつた子供の看護を、働きに出ている母親に代つてしなければならぬのである。それでも彼女は、それを煩いとも思わなければ、また單なる事務として處理するといふような、冷淡な態度にも出たことはなかつた。ここに住む子を抱えた二十六家族の女たちは、それぞれの形で、不幸な人生を経験してきた女性たち許りである。看護婦となつている間に醫師の子を宿した女。婚約を取消された時には已にその男の胤を宿していた女。妻子を置いたまま女と行方を晦ました男を呪いながら子を育てている女。身分が違ふと言つて、生木を割くように男と引離された女。夫に死別して子を抱える女。こうした父を持たない子の母親たちが、ここでは懸命な姿で生き續けているのである。そして、彼女たちは一様に、再婚の日をそれとなく想ひ描いていた。

しかし、ときたま見合ひに出て行く女はあつたけれど、子を連れていることが、どの女の場合にも、相手の希望を挽取つた。こうして見合ひから歸つた女は、同じことを口にした。

「やつぱり、子供があつては駄目ですわね。もう見合いなんかしませんわ。これでもう三度。もう懲りたわ」重い吐息をつきながら言うのである。どんなに努力しても、どんなに希望しても、子供があつては駄目なのだ。こうした結論が、何度か見合いを楽しんだ女たちの胸裡には、消し難く刻まれていたのであろう。

女には子供があつてはいけない。男には子供があつても女の方が我慢する。世間では、それが當り前のことだと信じられている。不合理な話ではあるけれど、こういう考えは何も新しい発見ではなかつた。それは男性がこの社會に持つてゐる既得權益なのであり、彼等が、封建時代の長い努力によつて、それだけの権利を獲得し、彼女らは長い忍従の生活で、この大きな権利を失つてしまつたのだ。

或る女は子供を置いて結婚に走つた。「行李の中には女の子の着物と人形と繪本とが入れてあり、その上にハトロン紙の包みを載せてあつた。開いて見ると紙幣が二枚あつて、その下に子供と一緒に寫した彼女の寫眞が一枚、盛装して、美しい顔に向けて」手紙と添えられている。泣きながら逃げて行つた女の心盡しであらうか。寫眞を手にして葵は考える。こうした例が初めてでないことを知つてゐる彼女に、作者は次のように言わせてゐる。

「親戚の人か何かで、子供を引取つてくれる人があれば、何も棄てては行かないでしようし、本人を探し出して見ても、結局、親も子も餘計に不幸になるだけじゃないでしょうか。あの人で見れば、こうしか出来なかつたと思ひますわ。——今野さんは子供の着物や人形なんか置いて行きましたけれど、その中に二人で撮つた寫眞が入れてありましたの。ちやんと名前も書いて……それが、今度めぐり遭つた時に親子の證據になるだろうという氣持じゃないでしょうか。あの人遣り方は我儘でしようけれど、その遣り方を憎む前に、子供を連れだした母親という境遇を、もつと何とかして上げなくてははいけなかつたのだと思ひますわ。今野さんのような人は、今後も、きつと幾人か出てくると思ひます」

不幸な女たちに雜つて働いてゐた彼女は、女であるという存在と自覺のなかで、決して他人事ではないと感じてゐた。これは、次のように作者に書かれてゐる高村晞三の感懐が、葵の解き難い疑惑を言い當ててゐるように思われる。

「今野つね子さんの事件は、さつき貴女が言つたように、彼女一人の問題ではなくて、子を連れた母親全體の問題だ。今後、鮫島まさ代も出て行くかも知れない。西久保とよも出て行くかも知れない。出て行く理由があるんだ。その理由は、子供を離れなくては自分の仕合せが掴めないという考えからだ。僕の母の時代には、子供を離れて母の幸福はないと思つてゐた。幸

福の性質が違ふんだ。結婚生活に這入つて幸福を掴みたい。そこで再婚のためには、子供から離れたくなる。——それなのです。今のよう荒々しい時代には、經濟上の變動が激しいし、道德觀念は變化して來たし、結婚生活というものが、昔のように平和にはゆかない。日本古來の家族制度が日々に崩壊してゆきつつある。この状態は、殆ど不可抗的な大きな流れになつて進行している。そして斯ういう時代には、男も不幸だが、女は一層不幸です。家庭には安住できなくなる女が多い。女も働かなくては生きてゆけない。その場合に子供のある女はどうすればいいんだ……嵐を凌いで生きてゆくためには、手足纏ひなものは棄ててはならない。現代ほど子供を連れた多くの女が迷つてゐる時代はなかつたらう。寮の人たちは大部分それです。かういふ見方は可成り極端だが、この傾向が、これから一層ひどくなることは考えられる。必要なのは、母子保護法を強化すること、徹底的な方法で育兒院を完全な、大きな國家的な組織のものにして、子供を連れた母親を子供から解放してやること。大事なことは子を連れた母親に自由を與えることだ。そして一旦解放された母親たちが、うまく自分の幸福を見附け出すと、また子供のところへ歸つて來るだらう。それでいいのだ。そこまで來なくては本當ではないと思ふんだ」

しかし、高村が強調すればするに隨つて、結婚に對する不安と恐しさが思われてくる。彼女は、結婚によつて生ずる女の不幸を考えた。薫風寮に生活する女たちを顧みる度に、切實な深さでそれは思い出されたのである。

私はいやだ。私は獨りで生きてゆくのだ。結婚しなくとも、女の幸福は無くはない。仕事だ。社會的にも有意義な仕事を見つけて、その中に全身を打込んでゆけば、立派に生き甲斐はある筈だ。男に頼ろうとする、その事が女を不幸にしているのだ。頼らなければいい。頼らなくても済むだけの勉強をして、謹嚴な生活をしてゆけばいいのだ。そう思ふ心の下から、それがどんなに重大な覺悟であるかが感じられ、泛んでくる高村の幻影を追い拂うために依怙地になつて自分の姿を、びつくりして見返したりするのである。生き抜くための意思の強さが愛の流露を拒むのである。これと云つた形で愛情を表明したことはなかつたけれども、それだけにまた彼女は、高村から離れたときの自分を想像することは不安でもあつた。

しかし、離れねばならぬ事態が降懸つてきた。それは肉親といつた唯一人の彼女の姉が、或る會社の重役に踏躪られたのを訴訟しようとして高村に頼んだところ、その重役こそ高村の兄であることが分つたからである。

姉の恒美は、何事にも従順な女であつた。誰にでも負け、どんな事態にも負けてゆきながら、

負けたなかに自分から小さな仕合せを見附けてゆく、慎ましく憐れな女であつた。電氣軌道會社の雨宮章爾という常務の祕書として働いていた恒美は、たまたま會社の園遊會のとき雨宮のボートに乗せられ、不意の求婚を迫られるのである。

「僕には子供が一人あるし、こんな事を君に云うのは失禮かも知れんが、もし君の方で厭になかつたら會社を罷めて、うちへ来て貰いたいと前から思つていたんだがね」

ただ一言の愛情の経過もなしに、突然雨宮は求婚の意志表示をしたのである。

「でも、あんまり突然で——」

「そう、いま君の返事を聞こうと云つても無理だろうけれども、一つ考えてみて貰えないかな。今日でも夕方からうちへ寄つて貰うと都合がいいね」

そう云い出すともう彼は、恒美の思惑などでんで振返りもせず、ぐんぐん自分の思う儘に振舞う男なのである。そして結婚するという約束は、雨宮の方で勝手に決め、恒美は雨宮の胤を懐妊するのである。そのあいだ恒美は、何の抵抗もせず、雨宮の意思の動くままに引廻され、秘かに來るべき幸福を胸に描いて待つていた。しかし、雨宮が恒美に求婚し、そして、恒美は彼の胤を

宿して何ヶ月かして、ようやく彼女の決心が定まつたところには、彼のところへは別な結婚話が持込まれていた。そして雨宮は、それに承諾を與えていたのである。

こうした事情から恒美は、會社に勤めることも出来なくなつて、アパートに引き籠つて、早晩生れる子供の準備を妹にも知らさずに進めていたのであるが、時おり訪ねて來た葵がそれを知つて憤る。そして破約した雨宮に抗議を申込むのであるが、彼は、「戀愛は成立したが、結婚は成立しなかつた。これは世間にざらにある事なんですよ」と言つて受附けぬばかりか、むしろ、女の弱點を女自身が自覺しなかつたことを、女の不幸の原因であるかのように言うのである。訴訟を起そうとして、葵が高村に頼んだのは、こうした姉の破約を法律の力で制裁できるものならと考えたからであつた。だが、それは無駄であつた。というのは、民法の原則として、結婚すべしという判決は、いかなる場合にも有り得なかつたからである。そして又、その相手が高村の兄であつたことが、葵にとつては二重の苦しみにもなつた。姉のために飽くまで雨宮と争うとすれば、間接には高村と争う結果になる。高村が兄に反いてまで、自分ら姉妹に味方するとは考えられな

5。
こんな事情から葵は、高村の許を辭したのであるが、姉の恒美は、葵の斯うした處置を心から

喜びはしなかつた。自分だけ諦めれば一切が圓滿に納まるのである。と、迷惑の廣がることを却つて怖れていた。だから妹が雨宮に談じ込むと言つた時には、顔色さえ變えて引止めたのである。この慎しみ深く足許だけを見つめて生きようとする恒美に比べて、同じ小説に登場する鮫島まさ代は、その性格からして全く別な立場を執つている女である。

3。

「獨身の青年のなかに理想の人なんかいやしない」と言つて、わざわざ妻子のある男を戀愛の相手に選んで、子供が出来てからも自分を誤つたと考えずに、相談に行つた辯護士(高村)に求婚するほど、積極的に行動の出来る女である。彼女は、男を知るためには、酒を飲む社會を知らなくては駄目だと思つて酒を飲む稽古をしたという。そして酒場へも料理屋へも待合へも行つてみたという。「それで私の附合つた二十人のうち、十六人までは私に求婚して來たんです。私はみんな斷つてしまつたんです。そのために、或る青年は私の目の前で毒藥の包をみせて、結婚してくれなければ死ぬと言つて脅かしたりしたんです。だけど、そんな人たちと結婚するなんて、馬鹿々々しくつて考えられなかつたんです。私がこの人なら結婚してもいいな、と思つた人が五人有りました

たけれど、調べてみると、みんな家庭を持つた人なんです。いくら探したつて獨身の青年のなかに理想の人なんか居やしない。みんな輕薄で、ちつとも落着がなくて、口先ばかり達者で、それだから私は、もう仕方がない。自分の生涯を託するに足る人なら、家庭のある人だつて構うもんか、という氣になつたんです。勿論こんな考えは無茶ですわ。無茶は知つていますけれど、獨身の青年なんて、凡そくだらない存在なんですから、已むを得ないと思ふんです。「かように觀察された現代女性の立場と、功利的ならざるを得ぬ事情のなかで、彼女は芽生えた愛情の獨自な理性に基づいて、妻子のある男の子を生む。しかし、その處置について高村のところへ相談に行くともう彼女は、高村の落着いた物腰や冷靜な素振りが氣に入つてしまい、はては結婚してくれとまで言い出すのであつた。

子を抱えて働くことの出来ない女の一人として薰風寮へ這入ることを勧めた高村は、自分の好意が結果から見れば迷惑を受ける勘定になつたので、内心がくしく思つていたのだが、相手の女は、そんなことに一向頓着なく、益々執拗に附纏つてきた。まさ代には、慎ましく子の母として暮すことなどは到底できなかつたのであろう。従つて高村の勧告など、むしろ、自分を避けようとする男の遁辭くらいにしか思えなかつた。彼女は、女としての生き方を素直に勧める高村に對して、次のような意見を述べている。

「私のような女には、再婚以外に何の幸福があるでしょう。子供を育てるために一生を捧げると云うことは知っています。でも、それだけでは満足できませんの。それは當り前じやありませんか。子供に一生を捧げると云うのは、男にとつては都合のいい言い分ですわ。女は子供さへ養つていれば、無事だからそう言うんでしょう。子供の父親は知らん顔をしているのに、母親だけに一生を捧げろなんて、そんな身勝手なことつて有るでしょうか。私は意地にも再婚してやろうと思つたんです。再婚というだけでなく、今度こそ本當にいい結婚をしなくては、私という女の生涯が意味ないと思うんです。私は間違つていないと思うんです。私は拮^{ひが}くれたり、僻^{ひが}んだり、自暴自棄になつたり、身を持崩したり、そんな愚かしいことは決してしませんわ。それは女の敗北ですからね。私は立派に結婚して、良い生活を築くんです。それより外に私の本當の生き方つてないように思いますから……」

しかし、このように積極的な行動と、烈しい意志で生活の地盤を築こうとしているにも拘らず、まさ代は何一つ仕合せらしい仕合せというものを探り當てていないのである。結婚に對しても独自の意見を持つているし、生活に對しても一定の計量を忘れはしないのに、結果として現れてくるものは意味のない破綻ばかりである。このことについて作者は、それが彼女の行き過ぎた性格からだと、次のように高村に言わせている。

「僕は最初からそう思つたんだが、あなたの考え方、すること、すべてが極端だ。行き過ぎてゐるんです。それは正しいと信ずるから遣り徹すのでしようが、世の中には、正しいことでも控え目にしなくてはならぬ事が澤山ある。それをあなたは知らないんだ。獨身の青年が愚劣だからと言つて妻子のある男に結婚を求めたり、男性の生活を知ろうとして一緒に酒を飲み歩いたり、それは女としての行き過ぎですよ。だからあなたの偉さや立派さを充分承知していても、結婚したいとは思わなくなる。男つてそういうものだ。女に對して多少の愚かさを求めるんです。だから女は、その賢さを控え目に出さなくてはならない。あなたは男のように縦横無盡に自分の考えを實現しようとするから、世間の男たちは、あなたを避けて通る。あなたは人前に出て恥かしいと思つたことがありますか。大抵の女は無意識な羞恥を感じているものだが、あなたはちつとも恥かしがらない。だから、おとなしくなれないんですね。恥かしがらないというのは自信があるからでしょうが、あなたの持つている自信なんて、獨りよがりな自惚れに過ぎないじやないですか。ほんの少し頭がよくて、ほんの少し他人より勉強したという、ただそれだけの事じやないですか。その自惚れを棄てるんだ。あなたは心驕れる女ですよ。その驕り

があるから大抵の男はあなたを敬遠してしまふんです。それが判つたら、あなたは今よりずっと良い人になるだろうと思ひますね」

このように作者は、まさ代をとおして、まさ代に近い型の女の生活態度を批評しているが、ここで思い描かれるのは、雨宮章爾の子を産みながら死んでゆく恒美という女性の性格である。彼女は、決して行き過ぎた女ではなかつた。いや寧ろ、控え目であることが彼女の場合は缺點であり、敗北の契機を導いたと思われるほど、一切が保守的であつた。彼女は鯨島まさ代のように、進んで男性を研究したり、理想の人を探し歩いたりする、そういう冒険心を丸で持たなかつた。或いは、戀愛をする能力さえもなかつたかも知れない。命を懸けて愛することの危険に先ず恐怖して、戀愛をさえ敬遠してしまふ。そういう臆病な女であつた。従つて、まさ代と反對の立場を信條として生きる女性ということが出来るが、しかし、行き過ぎない恒美も、結局、世の多くの不幸な女が引摺つたと同じ、重い足枷あしかせに足を掬われねばならなかつたのは、一體どうしたことか。尤も、以上に掲げた高村の、まさ代の批評は、今日の女性の破綻を指摘していると共に、未だ覺めざる男性の因襲的な女性觀をも曝露している。「女に對して多少の愚かさを求めるんです。」とか、「女はその賢さを控え目に出さなくてはならない。」とか、總べて舊い女の躰を好み、女性を單

る生活の慰安として眺める男が未だに壓倒的に存在することを物語つてゐる。と共に、高村の、そしてそれに代辯せしめた作者が女性の新しい慧智の方向に同意し得ぬことを明瞭にしたものだ。つまり、女が男のように縦横無盡に自分の考えを實現しようとすれば、現代の大方の男性の愛情は得られないと諭すところに、作者の因襲を守る和解の表情が隠せないのである。

望みすくない故に美しいと言われてきた女の美德というものは、言つて見れば、女の敗れてゆく姿に贈る男の感傷ではなかつたか。行き過ぎのない彼女は、初めて知つた男には棄てられ、棄てられたことを憤りもせず、死の床でその男の名を口走りながら生を畢えているのだが、行き過ぎたまさ代も、行き過ぎない恒美も、女として亡びている事實が意味ふかく女の弱點を物語つてゐるのは、何故であらうか。男と女との關係を考へるとき、男はいくら叩きつけられても、肉體的に亡びるといふ例は有り得ないが、女の場合には、肉體も生命も、一切のものが深い繋がりで敗れるのだ。女にとつては、戀愛の破綻が直接に生命に觸れてくるのである。氣持で生きることを望んでいても、肉體が先に亡びてゆく。死んでゆく。恒美の場合は、それではあるまいか。

昨日きのうから今日に生き、明日に憧れ、未來を夢みながら、よりよき實踐の意思を逞しく、歴史の

發展に加わることが人間の理想であるならば、これまでの女性たちの多くは、娘から妻、妻から母という生理的な展開のなかでのみ、生命の價値を狭めつゝあつたのではあるまいか。従つて、愛情の展開も、より大きく人間的に擴充されず、本能的な開花を中心に慎ましく行われてきたのであろう。

戀愛に於いても、母性愛に於いても、それは根源的には生理的なものの淨化の果に發展するものであつても、その豊富な展開と表現は、生理と肉體の限界を越えて、人間精神の多彩な開花を煽り、よりよき國家、社會の建設のエネルギーに變化しゆく筈である。「クレオパトラの鼻の高さが世界史を書き變えた。」という風の言葉も、卑俗には女性の容貌の魅力を誇大視した形容ではあるが、これをより廣く受取れば、戀愛情熱の豊饒多彩な發展が、歴史の發展に深く係わることの原理が思い泛べられるであらう。そして、事實、女性の愛情は、長い歴史の間に個人的生命の昂揚を左右し、それは擴大されて歴史的な人間の歩みにも鈔なからぬ功罪を齎したのである。しかし、その愛情の拍車は、與えるものと、享けるものという過程を辿り、女性は何時までも從順に慎ましく捧げるのみで、互の共同愛による合唱の聲とは成り難かつたのである。

因襲の歴史は、いよいよ愛情の展開を生理的な面に引据えることに終り、無意識のうちに、その作用の自然な素材さを喪わせるような結果さえ導いた。本來、潤い多くあるべき母性愛すら、

女性の歴史にあらわれる一つ一つの舞臺面では、様々な桎梏となり、女の生長の自然を妨げるものとなり、そして、全體に生物的なものに限定され勝ちであつた。それ故に、女性は愛情を生命として見做されながら、その愛情の歴史は、いよいよ自分本位の形で、主觀的に窄まり、ついに、おのれの身邊の瑣事にのみ心を奪われるような傾斜を表現するに到つたのである。「母系家族」の恒美のような女性の生涯を考へるとき、そのような事情が切實な實感で蘇つてくるであらう。

しかし、それならば、鮫島まさ代の生活態度にあらわれている行き過ぎとは、何を意味するのであろう。女らしさの無いことが原因だと言われてはいるけれども、男が最も好い條件で女を選ぶと同様、女も亦、戀愛や結婚に對しても理想を持つし、選擇もしたいのが當然であらう。たとへ、男を研究するため、待合へ行つたり酒場や料理屋へ行つたのが良くないとしても、「獨身の青年のなかに理想の人なんかいやしない。」と、女をして考えさせるのは、必ずしも女の我儘な獨斷だとばかりも言えない状態に、男自身の感情や思考が立たされているからではあるまいか。

「いくら探したつて獨身の青年のなかに理想の人なんか居やしない。みんな輕薄で、ちつとも落着きがなくて、口先ばかり達者で……」と、まさ代に批評されるような、生活の激流に漂わされながら、何らの自信をも増えず、日和見主義の方向にだれ込んでゐる青年を對象とした時、戀

愛や結婚を憧れる女の意味も、自から用心ぶかい計算に没頭しなければならぬのは當然である。従つて、男の側からばかり一方的にそれを非難するのは女にとつて迷惑であり、また行き過ぎという理由から敬遠するのも、男の共同愛への衰頹と因襲への甘えを表明したに過ぎないと思われる。

「母系家族」の作者は、「愛情を計算することは、一番利巧なようで一番愚かな生き方であつたかも知れない。最後には愛情を信ずるより他に生き方はないのだ。凡ゆる計算の果に、ただ残るものは、男の心を信じ自分の愛情を信ずる、それだけしか無い」と言つてはいるが、男の心と自分の愛情とを信じた結果として、實際に残されているのは鮫島まさ代であり、最上恒美であり、薫風寮の子を抱えた女たちであり、女一般であるのはどうしたことだろう。彼女たちは、一様に幸福を求めて狂奔した女性たちなのである。若い魂と肉體を捧げて、男を信じ、自分の愛情を信じようとした女たちはばかりである。それなのに、社會生活のなかで衝突する女の生活の矛盾は、女自身の意志とは係わりなく、女性の生活を不幸に導いたり、脱落させる結果ともなつて、日々の歴史に、女の涙の生活が限りなく綴られていく。

要するに作者は、女の不逞な生活の道行が、愛情を信じ得るか否かに係つていくことを繰返し述

べているのだが、女の脱落してゆく姿というものは、むしろ相手を信じて倚り懸らうとする、女の脆さに原因があつたのではあるまいか。女が社會的にも獨立できなかつたと云う古いしきたりが、ひたすらなる愛情にのみ没頭する弱い心の持主として、女を何時の間にか獨り立ちの出來ないものにし、また女自身も知らず識らずの間にそれを信じて生きるように馴らされてきたものではあるまいか。家庭生活に於いても、女が正常な、健全な發達をしなかつた理由のなかには、家庭のなかに置き忘れられた妻が涙の生活のなかで、ます／＼萎縮してゆき、母性としての裕かな愛や、妻としての信じ切つた夫への信頼があるにも拘らず、潑刺とした人間的自然性さえ失つた女の姿だけが取残されている有様である。ここでは、戀愛と結婚の統一などと云うことは思ひもよらぬ事柄である。それならば、男の心を信じ、自分の愛情を信じてることによつて、女自身が救われなことも考えられるだろうし、また女の幸福が、愛情に没頭することの中だけにあるのでないことも背けるであらう。

ところで作者は、行き過ぎない女として葵という女性を登場させているのだが、この作者の理想とする女性が、果して男の心を信じ、自分の愛情を信じ切つて行動しているかと言へば、そうではないのである。彼女にしても、臆病な推測と、用心ぶかい計算を怠つてはいないのである。それは、高村との交渉の經過を考えれば充分であらう。つまり彼女は聰明であるが故に、女の生

活に起り易い危険を自覺していたのだし、またそれ故に、男の愛情にも單純に倚り懸つてゆけなかつたのである。「自分でいい仕事を見附けて」という心理には、女の不運な歴史や見聞が、最も生々しく刻み込まれていたに違いない。だから彼女は、愛情に對しても、一面では消極的であつたし、性格に不似合なほど控え目でもあつたのであろう。

このような舊い因襲的な彼女の姿態は、たゞ生活の技術であり、計算の合理化から生まれたのである。同時にこのような抑制は、女一人が「社會」に立向つてよりよく現實的に生き抜こうとするとき、それが眞剣であればあるに従つて、ますます技術的にならざるを得ないのが當然であらう。何故ならば、自分自身の力以外に何を信じ、何に頼つて女性たちは、外部からの危険や障害を撥除^{はたき}けて生きられると云うのであろう。荒々しい波浪を、か細い腕で漕ぎ抜けてゆくためには、或るときは愛情に對しても計算は怠らず、或るときには、幸福ということについても疑い深い推測もしなければならぬのが自然である。殊に、生活的危機や道德の混亂に揺り動かされている男性を對象として、それは一そう活潑にされてゆくのが自然である。

そして、そのような愛情に對する計量や技術と、自己擴充との深い係わりの發展が、女性の無からの脱走と、新しい慧智の成長を煽り立てているのである。つまり、今日の女性は、男性の無力と動搖によつて、狭い檻から、廣い歴史發展の舞臺に躍り出ようとしているとも言えるであらう。

う。

小説の上では、高村辯護士の兩腕のなかへちやんと納められてはいるけれども、現實はこんな風に女を甘く處理してくれるかどうかは疑問である。従つて、葵のような女性たちの直面する生活は、現實的にはもつと厳しく、苛酷でもあるだろう。しかし、彼女の場合なら、高村を離れても充分に生き抜け得るであらう。獨立することも出来るに違いない。たとえ、現在のような激しい社會生活のなかでも、逞しい意志と生活力が、彼女たちに新しい活路を與えるに違いない。また新しい女性の自覺の烈しさは、前進する意思の犠牲と苦惱の數々を、決して果^{はか}無く敗北の轍に埋もれさせて了うことはないであらう。犠牲は、逞しい生活推進力の榮養となり、技術的慧智となり、苦惱の悲劇は、新しい生活轉換の歴史的前進の記録とならねばならない。

このような強い自覺と聰明な目ざめに立ち返つた女性像として、今日の小説に描かれている女性たちは、男性に負けない能力と教養を持ち、或る場合には、能力ある男性をもリードしてゆく女の姿であつた。

成程ふるき昔語りには、大阪城の淀君や、シーザに對するクレオパトラ、巴御前、板額といった、男まさりの女性はあることはあつたが、物語りとして残される程に、それは例外であつただ。けれども今日では、帝都の中心地ビル街に吞吐される女性の群のうちに求めるまでもなく、

地方都市は勿論のこと、片田舎の役場、産組事務所のなかにまで、男性に伍して、堂々とタイプも打てば事務も捌き、命令も發すれば指揮もするという女性を見出すことは困難でなくなつてきている。

4。

このような勝れた、男の能力にも比肩し得る女性の幾人かを思い泛べるとき、「東京の女性」に描かれる節子が、鮮やかな輪廓で髣髴する。作者の説明に従えば、彼女は、「若い社員の多い興産にタイピストとして働き、五年の間、血なまぐさい事件に係わることもなく、少女時代の潔癖を土にもつけずに、二十三を迎えた」觸覺の新鮮な女性である。

「瞳が大きくて、黙つていてもその瞳に見つめられると、何か熱い言葉を囁かれたように強い印象」を人に與える彼女は、巷で働く多くの女たちと同じ、職業婦人であつた。重役である伯父の口添えで入社した節子は、部長とか課長とかいう位置の人間から食指を動かされるようなことはなかつたが、偶然自動車の賣込みに絡まつて部長と親しくなり、果は求愛されるが、初めての經驗にも似合わず、冒險に心はずませるほど彼女は、若い心で相手の氣持を受けることが出来

なかつた。家計を支えながら職場に働く女性に鏘の如く附着してゆく、あの世間臭い心の固執が、青春の身に降懸つてきた男との交渉をも、楽しませなかつたのであろう。尤も、相手は四十に手の届く妻子のある男ではあつたが、妻と別れると言ひ出されても、彼女は興味を持つてなかつたのである。また六十に近い或る重役からも、同じ誘惑の手が伸びていた。三千圓出すからと言うのである。何を基準にした金額かは知る由もなかつたが、とにかく節子の周圍には、色々な男の好餌が示されてきた。

同じ会社に勤めるセールスマンの木幡と知合つたのは、凡そこの頃からであつたらう。「彼はセールスマンという最も自由な職業を持ち、帝都三千人の仲間の内でも、第一級の手腕の持主だといわれている、色の白い、がっちりした輪廓の顔立ちをした、獨身の青年であつた。立派な身嗜みをして伊太利物の自動車などを乗り廻している彼は、それでいて、只の一度も艶しい噂も立てられず身持してきた男であるが、この男と親しくなつたとき、初めて節子は胸のときめくのを覺えた。」と、作者は書いているが、彼女のセールスマンにならうとした動機も、いわば、彼と近づいたことが主な原因でもあつた。もちろん一つには、少しでも収入の多い仕事に携わつて、經濟的負擔を軽くしようと考えていたことも事實ではあつたが、セールスマンという仕事は、何よりもまず良き指導者がなければ出来ないう性質上、どうしても好意ある相談相手が必要だつ

たからである。

「ダットサンには女のセールスマンは幾人かいる。しかし興産では初めてだからな。どんなものか知ら。節子さんが若しなれば、案外僕らの強敵になるのじゃないかな。怖いな」

木幡は、節子の申し出を冗談まじりに聞いている風だつた。

「車は買うが、ついでに節子さんまで買いたいという不心得者が出てこないとも限らないからね」

それな風にも言つたが、結局、彼女の懇望を容れてやることになり、ここに彼女の、男に伍しての荒々しい競合の仕事が始められる。

セールスマンとして必要な知識は、木幡が色々に指導してくれた。顧客の歡心を買うための姿態や口上や機微についても、決意して掛らねばならないような事柄まで、彼女は木幡から聞かされた。困難と危険と、同時にスリルを有つた仕事であることが、次第に節子には呑込めてきた。

三ヶ月の豫習を卒えて、初めてセールスマンとしての仕事を始めたとき、想像以上に金になるその仕事の偉さが、女である彼女には緊々と徹えてきた。いやらしい男の場合も、蟲の好かない老

人の場合も、區別なく女の媚態を示さなければ客は満足しなかつた。そして、客の満足を買うためには、彼女も、或る程度は女の持つてゐる凡てを武器として、利用しなければならなかつたのである、これは彼女の、豫想を超えた困難な所作でもあつた。しかし、セールスマンとして出發した限りは、男の能力に負けない努力と勇氣とが必要である。だが女には、男の弱點に附入る以外に何があるだろう。彼女は、タイピスト時代に近附いて來た重役やその他の男たちを思い泛べ、接近する機會をそれとなく搜した。そして或る場合には、自分の肌に触れる男の手や誘惑にも、好意と親切を考慮して近附いて行こうと努力もした。抱えの運轉手たちの集つてゐる溜り場へ顔を出すようになったのも、木幡の指導があつたからばかりでなく、彼女自身が自發的にその必要を感じたからである。セールスマンたちは、この抱えの運轉手を買収することによつて車の賣込みを計畫していたのである。そして、それは七分どおり成功していた。

女であることが、男との接近を容易にはしたけれども、一面では、女の内容を護るための心勞が、男に理解できないほど深刻に骨身を痛め附けてきた。或る運轉手は、賣込みを主人に承諾させる代りに、結婚してくれとも言ふし、或る運轉手は、周旋してやるという口實で求愛して來ると云つた、隙のない凝視が節子を取巻いていた。だが、どの男も、眞剣な氣持で彼女を對象に擇んでゐた譯ではなかつた。連中にとつては、君塚節子という美しい若い女を、思いきつて擲擧し

てみたかつたのだ。そしてそのために、節子の魂にどのような傷が出来ようと、そんなことは初めから計算に入れていなかった。彼等は、堪能するだけ笑つてしまふと、後は、路傍の石のように節子の存在など無視してしまふのである。

「節子は何か張り合う氣持で一杯だつた」と書いて、作者は次のように彼女の心理を寫してゐる。「二十三の今日まで、これほど思いきつた侮辱に會つたことはなかつた。自分が落着いてこの凌辱に辛抱しているのが、不思議な位だつた。自分が一人だつたならば、部屋中を轉げ廻つて口惜し泣きに泣いたに違いない。——でも、あたしは腹を立てることは出来ないのだわ。セールスマンである以上は、自分が立腹するなど以つての外である。どのように踏んだり蹴つたりされようとも、相手が客である以上は、機嫌をとらねばならないのだ。見栄とか、意地とか、自惚れなどは、初めから捨てて掛らねばならない仕事なのだ。」と、こんな風に彼女は決意して、自分に集つて来る悪戯の注視を忍んだのである。

タイピスト時代に、或る重役に手を握られたと言つて、赤くなるまで水で擦つたことのある節子は、セールスマンに轉向して半歳も経つた頃には、男の體温を、とくべつ怖ろしいものと思わなくなり、女であることを却つて意識して商談に利用してゆけるような、ふてぶてしい感覺の女になつていた。二號になるなら三千圓の金を提供すると言つた男も、變つた節子の物腰や態度に

目を見張つた。

「以前の君なら、こうして手でも掛けようものなら、まるで毛蟲でも附いたようにびくびくしたものが、大した成長だ」

そういう言葉を聞いても、彼女は特別興奮もしなかつた。しかし、彼女がセールスマンとして達者な腕になつてゆくことは、木幡にとつては、何とも譬えようのない厭な氣持であつた。彼は考へる。——この氣持は、一體どうしたことだろう。セールスマンとして客を口説くこつは、誰でもない自分が、痒い處へ手が届くように教えた筈ではないか。虚實交々な口説きの手のなかには、第三者の眉を蹙めさせるような奥の手さえあつた筈である。しかも、節子が女性であることを、女の魅力を振翳すことを、眞面目に勧めたのも自分ではないか。それならば、老人に馴れ馴れしく近附いて行こうと、誰に取入らうと、彼女はただ自分が教えた通りを忠實に勤めているに過ぎないではないか。ああして男に肩を抱かれることも、頬と頬が觸れ合う程の馴れ馴れしさも、口説きの一手として、節子に十分言い含めておいたことではないか。それなのに、このように不快な嫌悪や動搖を覺えるのは、一體なにが原因なのであらう。嫉妬しているのではあるまいか。そうは考へたが、しかし木幡は、自分が裏切られたような氣がして、節子の動靜を落着いた氣分で靜觀していることは出来なかつた。

男の心理に益々深く喰い入つてゆくこのような嫌悪を、節子は知らなかつた。いや、假りに知つていたところで、この場合どうすることも出来なかつたに違いない。自分の選んだ職業に忠實であろうとすることは、同時に生活に忠實であろうとすることである。生活に誠實であろうとするためには、不正な手段を選ばない限り、凡ゆる方法で成し遂げるよう努めねばならない。若しも、職業に対する熱意のために戀人を失わねばならなかつたとしても、生活を棄てることは出来ない。事實、節子は少しでも収入を多くしたかつたのである。放蕩癖のある父と母を抱えた家庭を維持するには、タイピストとしての俸給では、どうにもならなかつた。だから、危険や困難が加わつてくることは知らない譯ではなかつたが、セールスマンという、比較的ぼろい収入のある職業を擇んだのである。木幡も、彼女のそうした個人的な事情をよく知つていた。にも拘らず、女性特有の羞恥や情操の薄れてゆく姿を見ると、それが職業のためとは云え、不愉快な氣持にさせられた。節子の妹に木幡の心が傾いていつたのは、要するに斯うした事情からである。こゝに新しい生長を辿る女性の強いられた悲劇がある。

妹の水代は、節子に較べて單純ではあつたが、素直な賢さを持つた娘である。かつて節子に求婚したことのある部長に言い寄られても、躍起にもならずには縋り抜け、却つて相手の氣持の裏を搔くような仕草を娛たのんでいるかの口振りをする娘である。

「今時のあたし達みたいな女は、そんなに間抜けじゃないわ。一森さんにどんな野心があるのか、姉さんに教えられないでも十分に察しているわ。でも、そんな野心を有耶無耶のうちに押えてみせるのが、あたし達の手柄じゃない？ 最後までどうとう相手が何も言い出せなかつたというように仕向けることが、あたし達の手柄だわ。ドレスや靴や帽子は、いくらあつても構わないわ。作つてやろうと云うんだもの。遠慮なしに頂戴してただけよ。言外に交換条件があるとなかろうと、そんな方面には、あたし至つて鈍感よ。鈍感ぶつているのよ。姉さんは直ぐ良心とか潔癖とか持ち出してくるんだけど、相手に思い知らせるには、却つてそうする方が氣が利いてるでしょう。むしろ積極的な方法だわ」

こうした會話からも窺えるように、彼女と節子とは、功利的な思考感情に出發しながらも、女としての生き方のなかに、互に背馳するような相違が形作られている。この相違を作者は、結婚を目的とする職業婦人と、職業と討死する覺悟の職業婦人という風に言つてゐるが、もちろん、それは外形のものであつて、それが兩者の本當の相違であるとは考えられない。それは、新しい職業的知性と倫理に目覺めた婦人と、いつか女性の無力を感じつゝ、生活の打算にのみ敏感な女

性との違いでもある。積極的に生活を開拓しようとする意思と、舊來の儘の位置と習俗を、より功利的に生かそうとする防禦的な構えとの相違でもある。が、とにかく水代が姉に較べて、仲々とした性格の女であつたことは事實であろう。木幡の心が節子から離れて水代に移つていつたのも、一つには、この明るい感情と巧緻な女の受動性が好ましく思われたからに違いない。かくして、木幡と水代とは結婚する。

5。

二人の結婚に承諾は與えたが、節子は、すこしも目出度い話のようではなかつた。彼女の心は聲にならない悲鳴をあげて、底知れない奈落に墜落して行つた。落ちて行く運命が、はつきりと解つた。それは何處にも取附く島のない破滅の實感であつた。

「あなたの行動を見てみると、生活第一、もともとあんたつて人は、戀とか愛とか言つていられない人間に生れついていたのだと云うことが、段々僕には判つてきたのです」

或るとき木幡は、そんな風に感慨を洩らしたことがあつたが、それを聞いたとき、節子は、職業をもつ女の或る悲しい結果を思わない譯にはいかなかつた。「そんな理窟はない。そんな馬鹿々々

しい理窟はない。戀とか愛を感じないように生きてきた人間なんて、どこの世界へ行つたつてある筈はない。神様は愛したり生きたりする人間として自分たちをお造りになつたのではないか」と、相手の言葉を跳ね返すように心のなかで反撥するものを感じるのであつた。作者は、木幡との對話のあとで、次のように節子の自己判断を描いている。

「節子の頭の中を、タイプスト時代の自分が掠めて通つた。あの頃の生活と、現在のそれとを比べて、自分でも次第に潤いがなくなつていると自覺していた。自分に残つている潤いと云えば、商賣に使用するだけの毒々しい、強調された女の潤いだけが残つているように思われて、暫くの間の自分の變化を呆然と眺める落莫たる氣持になつた。」

節子に對する木幡の感懐も、恐らくそれに似たものであつたに違いない。これは「東京の女性」に描かれる節子の素描であるが、ここに考えられることは、職業と結婚に關する様々な課題である。職業を持つた女性は、職業に生きるために男の愛情を離れてゆかなければならなかつたと云うのは、もちろん職業の性質にも依るし、女自身の個人的な傾向にも關係のあることではあるが、現實の問題として、今日の女性に對する男の無理解と因襲的女性像への間違つた思慕が大きな原因

を有っている。

たとえば「東京の女性」における木幡の場合がそうである。彼は、節子がセールスマンになりたいと言つて懇望したとき、虚實交々の口説きの手まで教えて、彼女の客に近附いてゆくことを勧めていながら、年寄や男の誰彼と區別なく媚態を示す彼女の態度を見ると、快くは思わないのである。彼は「嫉妬だろうか」と言つて自問しているが、自分が愛情を感じている女性が、セールスマンとして立派な成績を上げるようになったことを喜ぼうとしないで、却つて、線の太くなつてゆく節子に失望を抱くようになる。このことは、水代と交す會話のうちに明瞭にあらわれている。

「節子さんは男勝りだよ。だからあんな女と結婚すると、大抵の男は不幸になる、同時に、節子さんも惨めになるだけだ。だがそんなこと、君の姉さんは考えていないだろう。自分の平常の振舞いが男の人にどんな風に映っているか、そのことに氣附いたなら、節子さん、居ても立つてもいらなくなるだろう」

「仕方がないのよ。一家の責任を負わされているんだもの。遊びたくても、あれじゃろくろく遊べやしないのよ。女らしい潤いがだんだん失くなつていくと云うようなことを、姉さんはよ

く言つてるわ。あたしどうせ職業と討死する人間だつて……」

「そうなんだ。節子さんには、結婚なんて生やさしい感情は、凡そ似合わないんだ」

こうした木幡の女性に対する好悪感のなかには、男性に共通する利己的な感情がはつきり表れている。女は、優しく、美しく、従順であるべきもの、という古來からの道徳律に対する無意識の信仰が、最も近代風なセールスマンという職業に生きている男の生活信条として、搖ぎなきまでに固執されていることは、考えさせられる事柄だと思われる。

男たちの荒い生活の呼吸のなかに雑つて働く女性の肌理の荒さは、男が理解するよりも前に、女性自身が働く明け暮れの中で自覺している事柄である。古くから日本女性の美しさは、家庭における良き妻、良き母として良人の背後に身を潜め、子供の守りとして、家庭の垣の中に年老いてゆくのを美德とした。しかし、社會情勢の激化につれて、女性たちは過去の仕來りを靜かに守つて生きるということが許されなくなつてきている。従つて、女性自身の自覺のなかにも、過去の世界で男が求めた、いわゆる女の美しさや床しさは、劇しく遷り變る生活の日々において、別なものに變つてゆきつつあることを氣附いてはいるのである。別のものとは、云うまでもなく、明日の日本を築くための護りや生産に對する自覺を指しているのだが、そこには、より社會的な

規模で新しい生活能力の發揮されることが望まれており、従つて、言うところの女性的な羞恥や臆病さは、すでに女性自身の手で清算されるべきところにまで一切の事情が迫つてきている。

今日の女性の表徴は、街頭に立つ果敢な職業婦人の働きと、エプロン姿の人妻や、母親たちの健氣な意志であるとも言ひ得る。このことを考えるとき、「東京の女性」に描かれる節子は、今日いわれる自覺した女性の一人であり、「職業と討死する覺悟」の決斷に富んだ心情の強さに漲つてゐる。彼女は、自分で述懐している如く、「潤い」といえば、商賣に使用するだけの毒々しい、強調された女の潤い」だけだと言つて、寂寞とした感じを抱いているが、このように彼女を悲しませてゐるものは、「女らしい」潤いだけを求めている男の要求が、職業婦人の内面に培われてゆく肌理の荒さを嫌つてゐる事實を知つていたからであらう。

木幡の水代に移つてゆく心理は、今日の男性に共通する心理というだけでなく、社會と家庭を支配するものとしての立場から、その便宜と利害から、女というものを見て、そこに求めるものを基本として作りあげてきた封建社會からの男の習俗的な心理傾向でもあつたのである。これは今日でも、男の觀念に根強く残つてゐる陋習でもあらうか。しかし、今日の如く、男性に劣らない能力と生活力とを有つた、いや、能力ある男性をもリードしてゆく女性たちの信頼の對象とし

て、協力者として、健全な生活を打樹てようとする男の女性に対する理解が、單に女らしい習性の側面だけに注がれていると云うのは、どうした事であらう。それが男たちの過去の感傷でないならば、働く女性の自覺のなかに積み上げられてゆく、鋭い知性の閃きや、聰明な生活への目覺めを裕かな理解で受取るべきが本當ではあるまいか。今日の國家における強力な生産への要望と言ひ、新たな歴史の轉回の轟きと、總べて男性の過去の無理解を一掃し去るものであり、女性の逞しい進展の未來を祝福するものである。

Ⅱ 現代女性の發展と歴史への愛

1.

昭和期の代表作品にあらわれる女性は、まだ明治、大正から受継いだ發展の系譜を、より躍進的に展開しているに過ぎず、今日の女性の胸に一樣に伸掛る國家的責任と、その使命への新しい發展は現れているとは言えない。しかし、その發展を豫定する生長の過程にあること、並びに、いかなる苦難の試練にも耐えて伸びゆく歴史的理性の生長と、行動力の逞しさとは劃期的に表現されている。

たとえば、愛情の巡禮にさ迷い出るかの如き、「假裝人物」の葉子は、無思想時代のデカダンの代表ではあるが、輕薄な自負心の戯れから生涯の途を誤る「寢園」の奈奈江と同様、いわゆる轉形期の空虚のなかに飄弄された犠牲的存在である。彼女たちの敗北が、いかにも自墮落な女性の姿として寫し出されているのは、いわゆる生産への參與なくして、實生活を他力にすがるか、そんなことには無頓着でいられる境遇に在るからである。彼女たちも、また憫むべき時代の犠牲的

存在であるが、それは、現實の不合理や矛盾に對する闘いでなく、むしろ押し流される受身の姿であり、生活の意義を侮辱して復讐された例である。このように實生活を遊離して時代觀念の流れに、わが身を生贄にした女性の側らに、「眞實一路」の睦子のように、實生活から恒に、新たな意思と反省を受取り、眞實への心を撓めぬ積極性を培いゆく婦人の生長もあつたのである。

生活における婦人の依頼心は、溯つた原始時代から芽生えた。その依頼心の抜き難さは、見られる通り、昭和の今日にまで憂うべき心理的放浪の系譜となつて傳えられたのだ。星うつり、月かわつて幾世代を越えても、つねに傳統的な依頼心は、様々な姿態となつて消え去ることはなかつた。文學のために家を出た「假裝人物」の葉子が、男から男への放浪に心の不安を攪き消そうとしたのも、結局、彼女のなかに巢喰うていた依頼心のさせる業であつた。男から男へと渡鳥のように飛び歩いた彼女は、文學に憑かれるという形で理想を幻想のなかに追い込んでしまつた。理想は、實踐から離れた。それゆえに、彼女は男を選び愛することでは習俗を破り、自らの思うまゝを自由に追求しゆけるかに見える。だが、彼女には、その自由そのものが、無自覺に環境に押し流されるために餘儀なくされた放埒さに過ぎなかつた。と云うのは、彼女が自らを、自らで支えようとする意思に見離されていたからである。

「寢園」の奈奈江も、心理的な自由を思うままに發展させるかに見えながら、その自由が彼女を

滅ぼし、彼女が本當に求める方向から背かれる結果を導いてゆくのである。

この奈奈江や、葉子たちを代表とする女性が、舊い因襲を破つて新しい針路に己れの路を切開いたように見えながら、實際は、彼女たちのなかに脈々と原始時代から稟け傳えられた實生活を侮る習性や、それを他に依頼する心のために、自らを環境に破れ去るものとして表現しなければならなかつたのである。殊に奈奈江は、人間生活を、輕はずみな自負心の戯れに任せるといふ不遜な心理ゆゑに目指す方向を誤り、みずからの意思を絶えず分裂するものとして受取らなければならなかつた。眞の自主性を贏ち得ようとする努力の途から、攀じ登らず、他力本願的な自由の戯れが、いかなる犠牲となつて酬いられるかを特徴的に示す類例である。「若い人」に寫し出された女性像も、意思の分裂、愛情の不統一という點で、奈奈江の時代環境に生れた近代心理の畸形的な流動のそれである。

奈奈江や葉子に較べて、「眞實一路」の陸子は、實生活を、眞剣に自らの力で切開きゆく努力のなかで、徐々に搖ぐことのない信念を固めてゆく。しかし、「美しい囀」の乃武子は、實生活への努力のなかで、ひたすら餓鬼道に墮ちた功利主義だけを、學びとつた。そこには、女性の生活的獨立の困難が暗示されていると共に、永く人間性の裕かな伸張を遮られた女性が、他に縋る道を失つたとき、いかなる人間的破綻に陥るかを明瞭にするものだ。こゝには、いわゆる活動する女

性の努めて自省しなければならぬ人間的な破滅の最悪の象徴があるとは言えぬか。名利の餓鬼道に墮ちて、女性らしからぬ残忍な心理の究極を示す典型として、シエクスピアのマクベス夫人がある。乃武子は、その小さな雛形の一つであらうが、ともに女らしからぬ残忍さと餘りの功利性に捉われて、みずからの人間性を破滅させるばかりか、その娘博子の性格をも破滅せしめ、その幸福をもぎとる結果となる。

マクベス夫人は、自らの野望のためには、何物をも犠牲にする女性である。彼女は夫マクベスが躊躇うのを勵まし、主君ダンカンを亡きものにして王位を奪わしめようとする。マクベスは、夫人の野望に煽られた逆殺の罪が發覺することを恐れて被害妄想的な亂心に陥る。夫人も亦、夢遊病者となつて狂うというのが、シエクスピアに描かれた強烈な野望に驅られる女性の典型、マクベス夫人の悲劇である。とうてい比較にならぬ功利心の激烈な象徴の悲劇であるが、「美しい囀」の乃武子も、その物欲性以外に、盲目な性格ゆゑに娘博子の運命を破綻せしめる點は類似している。女性が經濟的に獨立すると云ふことは、その觀念や意識の自律性をも培いゆく基礎ではあるが、しかし、それが決して公式的に單純な展開を示すものでなく、むしろ、そのための努力が、人間性の破壊や、自他の運命の障碍となつた例を多く有つのである。乃武子はその一人である。彼女は、社會的獨立の地盤と職業を持つことにより、却つて、みずから破滅させざるを得ない一人

である。自立への積極性が、裕かな人格の發展を齎さない斯うした敗北は、繰返す如く女性の獨立立ちが如何に困難であるか、また、過去の女らしさの依頼心が激しく揺ぶられたとき、いかなる犠牲を待受けねばならぬかを暗示している。

しかし、乃武子によつて象徴される悲劇は、いわば發展しゆく現實の片側におけるマイナスの面である。このような自立する心の悲劇に較べて、「東京の女性」の節子や、「母系家族」の葵は、職業を持つことにより、長く閉された女性の、人間的生長の可能性を切開き、働くことによつて授けられる慧智の正しい生長の軌道を持ち得た女性である。そこには未だ、長く植附けられた男の偏見と無理解のための悩みがある。しかし、それは已に男の偏見の矛盾を嘲り、無理解が碎られねばならぬ運命にあるものとして描かれている。

大正時代から擴大された女性の職業への進出が、昭和の時代へと更に躍進し、その社會的な使命はより重く加わり、自立への希望も、可能の視野にあらわれたのである。従つて、職業婦人を主人公とする小説も數多く生み出され、作家も職業をもつ女性の形作りゆく新しい性格と、行動を主題とする方向に誘われたのである。或る作家は、女性の自立的な歩みを悲劇として、或いはそれが發展しゆく意義を辨えず、過去の「女らしさ」の喪われゆくのを嘆く風に描き出したかも知れない。しかし、或る作家の思想の陳さや、感傷の如何に拘らず、その眼が、發展しゆくものと

消滅し去るものとの、對立し交流する現實を正しく見通すことが出来るならば、職業婦人の成長の姿を、發展の未來を約束するものとして描き出すにはいないであろう。たとい現實的には、女性の生長への道が茨の道であろうと、それが女性の熱を帯びた努力によつて切開かれることが可能であること、いかなる習俗や傳統も、もはや、それを防ぎ止める力を有たぬという、いわば、女性發展力の前進の、必然性を描き出すであろう。「東京の女性」の節子や、「母系家族」の葵は、むしろ作者の女性觀に逆らうかのように、未來への發展の良質な面が結晶されているとも言える。

2。

婦人が生産に参加することによつて、いかに鋭い生活の慧智を培われるかは、「煉瓦女工」の少女が物語るところである。そして、今日の働く女性の多くが、けつして、みずからの獨立という立場からでなく、むしろ家の經濟の安定のために、進んで職場にあらわれざるを得ない環境にあること、そのことが如何に彼女たちを長い束縛から解き放つ機縁となり得るかを物語っている。もはや、婦人の生活や人格の自立が、女性みずからの生長のための、餘儀ない反抗としてではな

く、國家、社會や、家庭への協力、献身という形で、發展の軌道が造られつゝあるのを知らねばならぬ。彼女の國民的愛情が、彼女の人格的成熟への途となり、家族への共同の愛と、その實踐が、彼女を新しい人間的形成に導きつゝあるのだ。

會ての時代、みずからを男の習俗から解放し、おのれの運命を、おのれ獨自の意思で切開きつゝ、人格的な自律性を圖り取ろうとしたとき、先驅的な女性たちは、ひたすら自愛のために、男性に對立することを餘儀なくしたために、個人主義の窄い愛情に陥る危機さえ迎えねばならなかつた。明治の末から、大正にかけての時代、婦人の獨立への意思は、たとい、それが避け難い必然の歴史的理性であつたと云え、個人主義の芽生えによつて解放されなければならなかつたために、裕かな女性の人間的生長と背馳する傾向をも齎したのである。それは、已むを得ない犠牲や、行き過ぎではあつたが、そしてまた、將來の女性を發展へと急立てる意思の基底とはなつたが、その直接の結果は、男からの解放や、環境からの獨立が、女性みずからの愛情をエゴイズムのなかに閉込め、その人間的發展の廣がり個人主義の轍に突き落さねばならなかつた。かようにして、自己以外の何物をも考へることなく、たゞ功利的自我の貪欲な意思によつて自らを限定した曉は、みずからの個性の裕かさ、美わしさを育てはぐくむ機會から距たるばかりであつた。いわば、明治、大正における自由戀愛や、戀愛至上主義的思潮は、生活的基礎を有たなかつ

た悲哀を嘗めただけでなく、生活からの遊離のために、愛情の全人間的な擴充から見放されねばならなかつた。自由と解放への意思が、一面の積極性と共に、それを抹消するような否定的な傾向をも伴つたのは、すべて以上の理由に依つてである。だが、歴史は發展する。歴史は永遠の進化を止めない。國家生産力の劃期的な發展（例えばソヴィエトの如き）によつて必死に求められたとき、女性の人間的生成への可能性も、有史以來の規模の大きさで打ち開かれてゆくであろう。もはや自らが、みずからの運命を支配する自律の心を形成するだけでは足りなくなつた。みずからは深く、受繼ぎゆく歴史の發展に係わりを有つという自覺のもとに、凡ゆる愛情や、努力や、いとなみを、全人間的な愛情の自發的な献身によつて貫かねばならぬのである。國家への愛、母性への愛の豊かな燃焼も、決して自らを無心にして、利那的に溺れゆくことに終るのではない。それは、正しい自覺と、強い自發的な知性を通して、更に力づけられ、より擴充されてゆかねばならぬのである。

明治、大正、昭和の小説にあらわれた三代の女性の愛情と、モラルの展開は、一筋に發展的な方向を築き上げたとは言えない。そこには、思わぬ障害や行き過ぎの破滅もあつた。しかし、各時代に展開された多くの女性たちの、前進的な姿ばかりでなく、その否定的な方向のなかにさえ現代女性の自己革新を導く教訓の數々は秘められている。また、みずからの心の内側や底ふかく

に潜む、舊い過失や、破綻した女性の歴史的な性格の残滓は、次第に影を消し去りつゝあるにしても、まだ現代女性の一般の胸ふかく集喰うていることは否まれない。と、云うのは、如何なる革新の轉回も、歴史的には、無からの創造ではないからである。

なるほど轉形期の人間は、みずからの歴史を創造し、舊代と對立する方向に歩み行く。しかし創造的に見える彼らも、決して自由放埒に空想的な企畫を進め得るのではない。それは、彼らに受繼がれた傳統を引繼ぎ改造する形で、新たな歴史の形成が促されるのである。それ故に、いかなる轉形期や、革新期においても、舊いものへの憤怒と、新しい前進への歡喜に餓える精神のなかにさえ、みずから捨て切らぬ過去の惡質は生き残つていることを知らねばならぬ。それを征服し切るとは、ひとえに個人の自覺的な努力に依るのである。

このように、自己革新の完璧な實り^みは、それが四圍の環境から強いられる形でなく、みずからの歴史的自覺の發意によつて、完き結果を齎すのである。言うまでもなく、今日の女性は、日本の歴史の初まりからの性格、感情の漸進的な進化の結實を引繼ぎ、擴充しつつあるのであるが、過去の善惡の何れをも、たとい、それは衰弱と興隆の形で引繼がれようと、ともに受渡された事實は疑う餘地もないのである。それ故に、明治、大正から太平洋戦争前の女性の歴史的な性格と、その革新への闘いの姿を振返るとは、今日の女性の自己革新の課題に係わるところが尠くない

のである。すなわち、それは一定の歴史的な發展途上の姿として受取られると共に、自らのうちに、未だ根強く集喰う性格の流れとして、暗示ぶかき反省のよすがとして、省みられなければならないのである。その意味で、三代の女性の文學的反映のなかには、豫定され約束された女性の前進を、より充實するための課題が、限りなき豊富さで横たわつていたのである。

女性の歴史的躍進の途は、これを正しく消化し、克服しつゝ、次の時代への繼承を、より正しく果す責任の自覺に連なる。原始時代から世代を絶やさぬ土壤として尊ばれた女性は、今日から未來にかけて、その受身な形容を跳ね飛ばすものとして、積極的に歴史を發展せしめる基礎的な生命力となつて、無限に擴充されなければならない。

あとがき

(小説の女性と現実の女性について)

まえがきで、私は、文學が現實の反映であるならば、小説にあらわれる女性を辿つて、女性思想史を綴ることも可能だと書いた。しかし、これが可能だと云うことは、むしろ容易だと云うことではなく、その可能性は、實に複雑な困難を孕むということを傳えたい。

小説は、成程、たとい素材が架空なものであつても、作者の眼に映つた現實の女性像を媒介として創造されている譯である。だから、どんな小説も現實の何らかの反映であることに間違いないとしても、どの部分の反映であるか、一般的なものか、部分的なものか、その時代の特殊性を描き出しているか、それとも、作者の生きた時代の女性の特質でなく、それ以前の、或いは、舊い歴史のなかの女性の型であるか、そういうことを丹念に指摘するのは容易ならぬことである。専門批評家の間にさえ、その觀察の相違は絶えず論争となり得るし、また、批評専門の人にさえ困難なのだから、一般の讀者諸君が、それを正確に感得することは難しく、必要もないかも知れぬ。そして、事實をたくし自身も、この書に扱つた小説のなかの女性の觀察について、誤謬を犯

しているのかも知れない。しかし大體は、誤謬を犯すほど困難な解釋にまで至らないで終つた部分が多いのである。

それは私が卑怯で、無力だつたからではない。一般の讀者に對する必要の範圍を越えなかつたに過ぎない。殊に或る小説の主人公の女性が、どれだけ現實に迫つたものであるか、現實のどの層に生きた人か、作者はどんな意圖で書いたか、その意圖は何處まで達しているか、等々の問題には詳しく觸れなかつた。大抵の筋書に、右のような觀察に就いて必要な程度を書き加えたが、これを詳細に分析註解することは、批評論になるので止めた。

趣味や娛樂の程度で、小説を讀んでいけば、そうでないが、少しく詮議を深めると、小説の讀み方、解釋の方法は、現實のそれと同様に深い文學的認識と、社會、科學、歴史、等々の知識を必要とする。どれだけ、或る小説が現實性を有つかを知るには、歴史の實體そのものを知らねばならぬ。だから、例えば、明治時代の小説を讀むに、明治の歴史の總體に關する知識、その上にその歴史の發展する構造のなかに生れる思想の實體にも明らかでなければならぬ。

そして、何より重要なことは、作者が或る女性をどのようにつまり、新しい時代の象徴としてか、時代から敗北し去るものとして描いたかを見分けることだ。そのことは、作者が捉えた女性性は、歴史の發展のプロセスで捉えているか、若しくは固定したものとして捉えているかと云う

ことにも係わる。つまり或る作家は、一般に女性とは、こんなものだという風に書く。また他の作家は、この女性は、この時代の影響を受けた特質ある個性を有つというように書いている。

しかし、正しくは、作者の思想や意圖の如何に拘らず、その時代の特徴ある思想の影響や刺戟によつて、作者は色々な人物を形作るのだ。そして、その作者の生きた時代に見出すことの稀れな女性だつて創造する。それゆえ、例えば明治の小説の女性が、全部明治時代の特徴を帯びた、現存した女性であつたかどうかは嚴しい批判を要する。そのように、小説にあらわれた女性を捉えて現實の歴史を描くことは困難である。

だが私は、なるべく、有名な小説で、その生れた當時の社會現實を、正しく映し出した小説を選んだ。たいてい文學の傑作は、その誕生の時代の現實の特質を射ぬき、或いは、新しい思想、社會、人物等の支配的な傾向を際立つて明瞭に浮彫している。この書のなかの主要な三代の小説は、大體その時代の特徴的な性格を鮮明に傳えるものであり、また、多くの讀者の支持を得、特に明治、大正のそれは、ながく後世に残る傑れた作品のみである。だが果して、そのなかの女性が、その當時の女性のどの部分の眞實を、どの程度に捉えたものであるかは、多くの文學的、歴史的批判を要する。私は、その批判の大體の感想は、色々の箇所で傳えようとした。しかし實際の小説を讀まぬ人には、受取り難い箇所も少くないと思う。それ故に、この書を通じて、この書

のなかに現れる小説を批判的に讀まれることをも望む。

小説とは、すべて歴史的なものである、という意味は、どんな小説も、その生れた時代を超越することも、その時代以前に溯ることも、實際には不可能だと云うことである。

すべての文學作品、小説は、その時代現實の特徴を織り込んだものであり、特に傑作とは、前述のように、時代の特徴を鮮明に捉え、それを固定し終結したものととしてではなく、過去から傳わり次の時代へ延びゆく形で、つまり發展的に描かれたものである。従つて、時代現實のなかの葛藤や矛盾を捉え、その葛藤のなかで亡びゆくものと、榮えゆくものとを、正しく歴史の必然に沿うて捉えるとき、その作者の觀察の偉大さは輝やくのである。

以上のような、小説と現實との距たりと、係わり合いの微妙さを少しく説いたのは、單に、この書の成り立の辯としてより、寧ろ、小説が安易に娛樂や趣味としてしか讀まれないことに對する一つの警告ともしたい爲である。小説は、讀む人の思想、現實認識の如何によつて、實に複雑な見方で讀み散らされる。そして、その知識や人生體驗の深さによつて、小説の面白さ、現實性の有る無しも違つてくる。人生をより深く知らんとする欲求、眞實に對する情熱、そして博く高い知識なくしては、小説は本當の精神の糧とは成り得ないのである。

この書の叙述においても場合に應じて、小説の解釋に濃淡をつけた。それは、この書が小説を單に批評しただけでなく、一つの女性史的組立てを目論んだからである。現實が複雑である如く、小説の世界も複雑である。だから、この書の解釋だけで、各々の小説が割切れるのではない。唯、この書のなかの解釋と筋書は、女性の歴史的發展との係わり合いを中心としたものであり、同時に、各時代の女性の、眞に女性として前進する姿に重心を求めたので、時によつて、小説が單純に過ぎるくらい簡明に捉えられているところもある。それ故、一層、この書のなかで注目した女性のあらわれる作品は、力めて熟讀されたいと思う。そして、私は、この書の解釋が、女性の小説讀書の方向に、一應の基準を與えることになり得るよう望んだ。また、各作品の消化の方法についても、一つの指針となり得るように、つまり、小説の複雑さを單純化し、單純化を複雑化し、ともかく豊富な世界の觀察に應じ得るような傾向の發展にも盡そうとした。果して、この貪婪な意圖が充たされ得たか否かは、識者の批判を俟つばかりである。

たゞ、小説作品を選び出し、それを素材として女性思想、倫理史たらしめようとする企ては、今まで試みられた例を寡聞にして知らない。多分この書は、文學作品を材料として、女性の發展史的經過を描こうとした點で稀有なものだと信ずる。この稀有な試みは、單なる女性思想史と異つた、そして其處には、感じ得られぬ素材の確かさに依頼したところに特徴がある。實感を高め得る素材

は、各時代の代表的なもので、容易に讀者の手にも入り易い。また、女性史に類するものは、すくなくならず作られており、その面に造詣のない私の容易に爲し得るところでもない。そのような考えから試みた、このさゝやかな企ては、しかし、小説というものの有つ複雑な條件によつて、組み立と系統づけは單純ではあり得なかつた。しかし、ともかく敢えてこれをやり終えた。と云うのは、この企ての底に蟠まる、こんにちの女性問題に對する私の關心がそうさせたのである。この書のなかの、女性の様々な姿態、性格のそれぞれは、今日の女性のなかに如何様に受け傳えられているだろうか。それに對する一般の評價は？ 發展は必ず停滞を伴うという歴史の法則と、今日の發展性の歴史的過程に對する認識とを深め得るならば、その發展的性格を更に擴充することが可能だという考えに隨つて私は書いた。私は又、これを初めとして、女性の歴史的發展に關する企てを深め、より充實した努力を結晶させてゆくことを誓いたい。

14663

近代日本文學より見たる

女性觀



昭和二十三年七月廿五日印刷
昭和二十三年七月卅日發行

定價一〇〇圓

著者

矢崎 弾タケノコ

發行者

東京都世田谷區玉川田園調布一ノ三九
高坂 久喜

印刷者

東京都杉並區馬橋四丁目四四九番地
竹澤 眞三

印刷所

東京都杉並區馬橋四丁目四四九番地
中央印刷社

發賣元

東京都千代田區神田淡路町二丁目九
日本出版配給株式會社

東京都目黒區三谷町五三番地

發行所 日本出版株式會社

出協會員番號A一一四〇五一番
電話荏原(08)三八八五番
振替口座東京一三九・三六四番

41

日本出版株式會社

9/2.5
Y67

年 10 月 4 日 286

(16)	(2)	閏八	閏八	閏五	閏六

新編圖書

終